41681
教科書文庫
4
810
41-1910
20000
7195 2

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

4a
810
明43

訂再明治讀本

芳賀矢一編

卷六

資料室
42
810
明43

明治四十三年一月二十六日
文部省檢定濟
中學校國語科用

文學博士 芳賀矢一編

再訂 明治讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

広島大学
教
71952
図書

目次

再訂 明治讀本 卷六目次

一 菅公左遷(韻文)……井上哲次郎……二
二 誠とは何ぞ……竹越與三郎……六
三 朝顏をおくる(書翰文)……川上瀧彌……八
四 胡枝子……森廣……一一
五 墓詣(韻文)……小金井君子……一二
六 印度の寓意譚……一三
七 日本の農業……横井時敬……一六
八 農學の先哲を祭る文……二〇
九 模範村長の歡迎會……二三
一〇 九重の山水……大橋乙羽……二九

一一 六太夫の晴雨計……石黒忠悳…三六
一二 時計倶樂部(口語文)……三八
一三 相模灘の落日……德富蘆花…四九
一四 自然美と人工美(口語文)……井上哲次郎…五三
一五 讀書の選擇……增田藤之助…五七
一六 ハンニバル……矢野龍溪…五九
一七 山田長政……坪內雄藏…六九
一八 うれしさ……幸田露伴…七四
一九 生物……大西祝…七八
二〇 我國の風光……藤岡作太郎…八一
二一 國船(韻文)……八四
二二 ウエニスの商人(口語文)……八五

卷六目次終

二三 ペリー紀念彰誼會に於ける大隈伯爵の演說……一〇四
二四 カーネギーの青年時代……手島精一…一一七
二五 我國の工業界……一二一
二六 ボアソナード君の歸國をおくる詞……井上毅…一三三
二七 道德と法律との關係(一)……梅謙次郎…一三五
二八 道德と法律との關係(二)……同……一三〇
二九 努力生活……加藤玄智…一三六
三〇 吉野山(韻文)……吉岡鄕甫…一四八

再訂明治讀本　卷六

一　菅公左遷

行手にかゝる雲霧に、
心もはれぬ旅の空。
征衣いく度ふりさけて、
都の方や眺むらん。
夢驚かす驛路の鈴、
瀨戸の入江の浪枕。

征衣ふりさけ
驛路の鈴

おもへば戀し去年今宵、
おもへばゆかし雲井の空。
東風だにも慕はしき、
心つくしのよしさらば、
身は水底に沈むとも、
月ぞ照らさんわが誠。

二　誠とは何ぞ

誠とは何をかいふ。誠とは内に敬虔の念ありて、外に動作ずる所これと違はざるをいふ。是故に内外一致は誠なり。内省疚しからざるが如き、屋漏に愧ぢざるが如き、皆誠の致す所

敬虔
内省疚しからず屋漏に愧ぢず

なり。唯々誠あれば、以て君子と稱するに足る。至誠以て之を貫くがごときは、殆ど常人の地位を踰えて、鬼神にちかし。吾人は楠公に於て何を尊敬するか、其至誠を尊敬するなり。吾人は義士に於て何を驚嘆するか、其至誠を驚嘆するなり。吾人は基督に於て何を仰慕するか、其至誠を仰慕するなり。吾人は孔子、釋迦又はソクラテースに於て何を崇拜するか、その至誠を崇拜するなり。

凡そ賢人君子若くは聖人と稱するものは、吾人が其性格に於て至誠を認容するものなり。内心竊に吾人を瞞著せんと欲するものゝ如きは、如何に外面を修飾し來るとも、吾人は決して賢人君子とせざるなり。賢人君子の資格は唯々至誠

仰慕
崇拜
性格
認容

の存否いかんにあるのみ。若し至誠にして存せんか、必ず人を動かすに足る。其盛なる者に至りては、千歲の久しきを經て已まず。啻に已まずといふのみならず、愈人を動かし來る。これ何の爲ぞ。人皆其誠に感ずるなり。

小人は至誠の何たるを知らず。內に思惟する所と、外に動作する所と必ずしも一致せず。暗黑面に於て邪惡を遂げ、外に向つては、矯飾してこれを隱蔽し、表裏齟齬して徹底せず。之を僞善といふ。僞善は人を動かすこと能はず。これ至誠を缺くに由るなり。

至誠は心の幽邃なる處より來る。故にこれを感ずるものも亦心の幽邃なる處に之を感ず。故に人を實在的方面に於て

表裏齟齬

幽邃

實在的

動かすを得るなり。至誠は遽に認識すべからざるに似たり。これを認識せんには、何の端緒かある。眞に茫漠として影なきが如し。或は顯れ、或は隱れ、錯雜紛亂して、その眞相遂に明ならざるかと疑はる。然れども又古今の事實を考ふるに、至誠は到底蔽ふべからず。強ひて之を蔽はんか、石と石と相擊ちて火を發するが如く、反りて明光を放ち、遂に千歲不滅の光明となりて、永く人心の隱微を照らし來ることあり。今菅公の如き、即ち其人なり。

無用の辯論を止めて、公の事蹟と詩文とを瞥見せよ。其至誠は炳として疑ふべからざるなり。至誠の人は賢人と呼ばざるべからず。若し菅公の如き至誠の人を賢人君子とせざれ

茫漠として影なきが如し錯雜紛亂

隱微

瞥見

炳として

だに
すら
身世匆忙
案外の上首尾
瀏覽
可憐姿致

ば、我日本には一の賢人君子だになしといふに歸せん。菅公を賢人君子とすることをすら否定せんとするが如きは、偏見の甚しきものと謂はざるべけんや。（井上哲次郎、菅公小傳）

三　朝顏をおくる

肅啓　身世匆忙中の少閑を偸み、今春頂戴致候朝顏を培養致候處、素人の手際としては案外の上出來に出來申候。或は小生の手際ならずして、種子を作りし老兄の手際なるやも知れず、何はともあれ、二株供瀏覽候。

夏時の草花多しと雖も、此花に勝るものあるべしとも思はれず。可憐の點に於ては、蓮馨花に及ばずと雖も、頗る姿致に

清楚
偶爾
槿花一朝
、、ともがな
芳烈
科學的工夫
園藝界の一大革新

富み、清楚の點に於て風信子（ヒヤシンス）に優らずと雖も、色彩は之に勝る。泰西にて之を「朝の榮」と申し候もの偶爾ならずと被感候。但其生命の餘りに短くして、槿花一朝の諺をなすもの惜むべしと雖も、鳩巣流に觀察して「朝顏の花一ときも千とせふる、松に變らぬ心ともがな。」とみれば、又頗る面白くも思はれ候。

聞く所によれば、英國邊にては、此朝顏に芳烈なる香氣を含むもの有之候由。元來熱帶國のもの故、可然事と存候。老兄等一歩を進めて科學的工夫によりて芳香を回復せられんには、園藝界の一大革新ならんと存候。（竹越與三郎、三叉書翰）

秋の七草
紅白點々
白露團々

四　胡枝子

（萬葉集十卷）

秋風は涼しくなりぬ馬並めて
いざ野にゆかん萩の花見に。

（萬葉集）

山萩やまばらながらの花ざかり。

此花秋の七草とて、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗と並び賞せらるゝものなり。砂を燒く盛夏已に過ぎて、初秋の冷氣清らかなる頃、曉朝杖を郊外に曳きて、萩花をさぐれば、紅白點々として開き、白露團々として其綠なる圓形の小葉を埋むる樣、げにやさしき眺なり。

うつろはんことだにをしき秋萩に
折れぬばかりにおける露哉。

伊勢

白露をこぼさぬ萩のうねりかな。

芭蕉

萩はもと山野に自生するものなれども、亦庭園にも之を栽ゑて賞翫す。今を去ること一千六十餘年前、已に萩の花あること史に見えたれば、我國の萩は由來は久しく愛賞せらるるものなるを知るべし。古歌の初見草、月見草、庭見草、玉見草、古枝草、秋地草、鹿鳴草などは萩の異名なりとぞ。萩は荳科植物にして宿根なり。一種木萩とて、其幹、小灌木の如き大さに生長するあり。宮城野の萩最も顯る。北海道には野生の萩甚だ多し。

萩が花垣根もたわに咲くときは
野べも思はぬものにぞありける。

眞淵

人煙稀

嘗て人煙稀なりし時、馬背に騎して、雨龍原頭を過ぎ、數里の平野、一目萩花開くの壯觀に驚きたらんもの、豈著者のみならんや。

一目萩花開く

わがおりしにしきならずや、二葉より
おほしたてつる秋はぎの花。　有功

おほしたつ

萩の花の、世の虛榮を避けて、靜に己が品性を全うする風情は、氣高き婦人の潔き節操を忍ばれて、一種の高尚なる氣品を具ふ。谷川の水さゝやく邊に露を含み、こもれる愁を胸に包みて、笑む姿のゆかしさは、一入ひとの愛憐を惹くものなり。

虛榮

谷川の水さゝやく邊

（川上瀧彌、森廣、はないより）

五　墓詣

一、奥津城近く一人立てば、
身にしみ渡る秋のあらし。

二、三年の月日夢と過ぎて、
苔むし經りぬ父の御墓。

三、年毎めでて作りましゝ、
白菊一枝手向けまつる。

四、色香の清き是の花を、
學べとのりしむかし忍ぶ。

（小金井君子、中等唱歌）

六　印度の寓意譚

(一)　運と働

或國の王、其宰人と物語の序、「汝は世に運といふものありと信ずるか。」と問ひしに、宰人「仰の如く、是あるべし。」と答ふ。「然らば其有無を示せ。」との命に、宰人かしこまりて、一夜果物と、小石と、一粒の寶石とを雜ぜ入れたる籠を天井に吊し、下僕の中、運を信ずる者と、働をたのむ者との二人を呼び來りて、件

の闇暗の部屋に臥せしめつ。「運と働とは共にこの籠の中にあり。運あるものは運の結果を受け、働あるものは働の報を得ん。」とて、宰人はそこを立ち去りぬ。

やがて一人は靜に床に横たはり、一人は樣々工夫して、漸く籠を探し當て、暗中より果物と石とをえり分けて、自分は果物を食ひ、「懶惰者には之を與へん。」とて、小石を投げ附けたるに、下なる男は、唯之を拾ひ置けり。

翌朝王と宰人と、その部屋に來りて、二僕の得たるものをあらためしに、働を信ずる男は果物を飽食して鼾睡し、運を信ずる男は計らずも寶石を得て喜び居たり。宰人王に語りていふ樣、「世には運といふものあり。されどその稀なること、果

鼾睡

百發百中

物と石との中に寶石の稀なるが如し。寧ろ働の百發百中なるに如かず。」と。

(二)　梟と鴉

梟と鴉と互に敵なり。梟鴉を罵りて曰く、「晝を賴む者の憫れさよ。夜見得る者いかでか日光の力を借るべき。」といへば、鴉は、罵りかへして、「夜に誇る者の愚さよ。晝見えざる者の、いかでか夜見ることを得べき。」のち梟と鴉と相和して友となりぬ。梟は鴉に向ひ、「君の夜を貴ばざるも道理なり。君が黑く麗しき衣服は夜の黑きよりも黑し。」と褒むれば、鴉「いやとよ、君の日を貴ばざるこそ道理なれ。君が圓く輝ける眼は、日輪の一部にてもあるべし。」と褒めかへしたり。敵となりては謗り、

友となりては褒む。其辭共に巧を極む。

(三)　雀と鷹

一羽の雄雀、高殿の屋根をさも危氣に歩居るを、雌雀巢の中より見て、「何故に、しかく危氣にはしたまふぞ。」と問ふ。雄雀答へて、「我體軀の、見かけによらず重ければ、其重量にて、此樓の傾き倒るゝを恐れてなり。」と答ふ。

側の喬木の上にてこれを聞き居たる鷹、「心悪きは雄雀の高慢かな。一番驚かしくれん。」とて、つと彼の高殿に舞ひ下りたれば、雄雀は膽を消し、周章てゝその巢に逃げ入りぬ。雌雀何故にかくは周章てゝ歸りたまひし。」と問へば、「果して高殿崩れかゝりたれば急ぎて立ち去りたるなり。」と答ふ。鷹は思は

ず失笑し、げに言葉の大さと、身の大さと同じからんには、天地の廣きも置き所なかるべし。」とて飛び去りぬ。

（ラヂユー、印度物語に據る）

七　日本の農業

太古漁獲の業を操ること多かりしは勿論なるべけれども、我日本民族は夙に農耕の術を覺り、之を營みて生業となせり。田には稻を植ゑ、畑には大小麥、粟、豆を作り、之を五穀として其生產を食用に供し、楮麻を植ゑて衣服の料となしたり。但し當時は家畜の肉を食し、乳を飲む風俗なく、また之を使役すること多からざりしがゆゑ、雞を除くの外あまり家畜

灌漑
勸奬
要素

書院

を養ふことなかりしが如し。

就中、米は貴人の常食にして、之を產する稻は重要なる作物なりしゆゑ、之が栽培には最も力を致し、歷代の農政として最も觀るべきは、稻田灌漑の用の爲に、諸國に池溝を開かれしことなり。既にして蠶種を漢土より傳へ、楮、麻、布の代に絹布を用ゐること、貴人の間に行はるゝに及びて、歷朝の勸奬により、蠶桑の業大に普及進步したり。是に於て養蠶は五穀の栽培とともに我農業の重なる要素となれり。

我國建國の當初は、豪族地方に散在し、到る處人民を使役して、農業を營ましめたりしが、大化に至りて、人民は始めて天皇に直隷し、班田收授の制下に、均平の惠に浴し、租庸調の規

稅斂の苛重

定により、稅斂の苛重を免るゝを得たり。然れども農業の規模は當時より極めて狹小にして、男一人に付田三反、女に は其三分の二を供せらるゝに過ぎざりき。

蒙昧に屬す

建國の太初より、應神天皇の御代までは、所謂蒙昧に屬す。而して此御代より以來、世の開明に伴なひ、農業も著々進歩の途にありしが、特に歷代民を治むる道に心を用ゐ給ひ、漢土の諸法を傳へて、農耕の改良を圖られしこと、僂指すべからず。

王綱の弛む

然るに、王綱の弛むと共に、大化の制も廢れ、莊園の制下に土地は兼併せられ、農民は豪族に苦役せられ、苛稅に泣くに至りたり。其後天慶の亂あり、引續きて世平穩ならず。遂には武

天下麻の如く亂る

家の世となり、應仁の亂後、群雄諸國に割據して、天下麻の如く亂れしより、農民は其堵に安んずる能はずして、農業の進歩も一大頓挫をなせり。之を暗黑時代となす。

堵に安んず

一大頓挫

文祿以降天下漸く一統し、三百年近くの治平と諸侯の勸奬とは、互に相待ちて、此に農業は一大進歩をなせり。之を中興時代とす。

羈絆を脫す

明治維新は、在來の封建制度を打破し、其壓抑を解き、人民は隷屬の羈絆を脫して自由の民となり、土地は無條件に所有となすことを許されたり。之より以降、歐米各國との交通頻繁となりて、作物、家畜の輸入を得たるもの多く、栽培、飼養の良法の傳りたるものまた少からず。わけて農學の輸入せら

無條件

れて、之が研究大に進み、農政亦、再び大に振ふに至りたるが爲に、農業の進歩發達をなせること尠少ならず。

是に由りて之を觀れば、我國の農業は其進歩の途に於て進退消長時に之れありて、皇室の隆替、と、其運命を齊うせる跡あるなり。要するに我農業は皇室の保護、誘掖の下に、始めて大に發育するを得たるものなれば、皇室の鴻恩豈等閑に附すべけんや。

進退消長運命を齊うす
誘掖
等閑に附す

八　農學の先哲を祭る文

維時明治十五年五月十五日、大日本農會頭二品勳一等能久親王、謹で貝原、宮崎、佐藤、大藏等先哲の靈に告ぐ。

（横井時敬、農業原論）

我會員中村直三、躬ら稼穡に從事すること、茲に數十年。古今の得失、實驗せざることなく、苟くも世に利し、物を濟すの務あらば、則ち行進勇直殆ど其身を忘る。是を以て海内皆推して農師となす。

稼穡に從事す

今茲三月、朝廷米麥共進會を東京に開く。直三、首として甄拔を蒙り、天顏に咫尺し、特別名譽賞牌及び金圓を賜はる。直三の榮寵に極れりと謂つべし。

甄拔
天顏に咫尺す

是に於て自ら謂へらく、「吾が今日あるを致すは、皆先哲の賜なり。吾何ぞ與らんや。」と懷舊の餘、遂に本日を卜して大に祀壇を築き、先哲の靈を迎へ、以て報本反始の義を表す。其意洵に厚し。方今人情日に漸く輕薄、其流を汲んで、而して其源を

報本反始

忘るゝ者甚だ多し。乃ち此擧獨り農事を益するのみならず、其風敎を助くる亦大なり。

遺緒　惟るに、本會講ずる所のものは、大抵先哲の遺緒に屬す。然らば、誰か其功德に浴せざるものあらんや。我會員たるものは、誼宜しく趨りて相共に籩豆の事に與るべし。能久因て會員に代り、聊か鄙衷を告ぐ。尚くは饗けよ。

籩豆

尙くは饗けよ

九　模範村長の歡迎會

自治　我邦自治體の改良發達に熱心なる同志の團體自治協會に於ては、其筋より、全國自治の模範と認められたる町村中、靜岡縣稻取村前村長田村又吉、宮城縣生出村長長尾四郎右衞門、千葉縣源村長山本八三郎三氏を招待し、一昨日午後四時より、華族會館に於て歡迎會を開きたり。これ實に近來耳をそば立つるに足るの美聞なり。社員の一人は多大なる趣味を以て此會に臨みたり。

歡迎會

耳をそば立つるに足る

華族會館樓上の廣間は人を以て滿たされたり。北海道長官園田安賢、臺灣民政長官後藤新平の兩氏が、日本の寒熱兩極端を代表して此會に臨まれしは、偶然にて妙味ある對照をなせり。其他會する者七八十名、多くは當代知名の士なり。蒔繪の椅子、金塗の椅子、花絨緞、金緣の眼鏡、金鎖、金光燦爛、實に善盡し美盡したる廣間の中に、三村長及び稻取村小學校長太田米吉氏の控へたる有樣は、數枝の野梅を折り來つて、七

兩極端

對照

善盡し美盡し

詩趣其間に動く

寶の花瓶に投げ込みたるが如く、一種の詩趣其間に動くを覺えたり。

撮影

まづ殘雪の石間に白き庭前に於て、樺色の夕日を浴びつゝ一同の撮影を終り、再び廣間に戻りて、同協會評議員の一人なる、子爵加納久宜氏が挨拶の下に歡迎會は開かれたり。評議員湯本武比古氏は先づ起つて稻取村長田村又吉氏を紹介せり。田村氏劈頭名乘り上げて、「私は天保時代の生れで、無教育な山家育ちで御座います。今年は六十四になります。」と缺け落ちて疎になりたる齒の間より漏したり。實に溫然玉の如き老翁にして、禿げ上りたる額に、積德の輝あり。藹然たる眼に、平和の源泉を貯ふ。質素なる紋附羽織に赤縞の餘りさりとて

劈頭

山家育ち

溫然玉の如き老翁

平和の源泉

靈氣

新しからぬ袴、その六十年の勞働に鍛へたる銅鐵の腕を垂れ、松の瘤の如き双手の指を組み合せ、恐れず、恥ぢず、さりとて誇らず、悠然として直立せり。

「萬物の生育は天地人三才の合體から成ります。我々百姓が米作を致しますのも、天と地の大きな働に、聊か人間の力を加へると云ふに止ります。さうして其出來上つた物は天と地と人と三つに分配するのではなく、人間ばかりで之を收めるので御座いまず。どうも有難い事でございます。ですから人間は德を積んで、天地に御禮をしなければなりません。」

言に一種の靈氣あり。金色燦爛たる人、有爵の人、有位の人、名

傾聽宛として風采

心の物産

眼燃ゆるが如し

士、學者皆頭を低れて傾聽せり。宛として二宮尊德翁の風采ありとは、記者のみの感想にはあらざりしが如し。

「農業を改良し物産を發達させ、それで村が盛にならぬとは不思議です。何故だらうと考へました。これは教育を以て人間の心の物産を發達させることに氣が附かぬからです。さう思つて見ますと、どうも教育は學校の門から外へ出ない。生徒は學校語と、家庭の語と、他所行の語と、三段に語を使ひ別けるので御座います。これではいけませぬ。農事と教育とは繩の様に撚り合はなければならぬものだと考へました。」

此に至つて老翁が灰色の面は、熱心の潮に彩られ、其眼は燃

一筋の繩に撚る

ゆるが如くなり來れり。

「他の事は存じませんが、私共のやうな百姓が何か目に見える功績を擧げようと致しますには、どうしても十年か十五年は掛ります。私が心ある人達と相談をしまして、農事と教育とを一筋繩に撚り合はせようと企てましたのは、抑も二十六年の一月で御座います。今では世間から模範村などと云はれるやうになりましたが、實際は一つとして人の模範になりさうな功績が擧つて居ません。御恥しいことで御座います。」

と云ひつゝ、後の椅子に坐せる、極めて質朴なる、多分此老村長の助役なるべしと思はるゝ風采の老爺を指し、

鋤鍬の戰爭勝閧

「此人は私の村の校長で御座います。教育を學校の門の外へ出して吳れたのは此人の力で御座います。二十六年以來、靑年會は勿論の事で、母の會と云ふものが出來、未婚婦人の處女會、天保時代に生れた私のやうな頑固な老人を敎育する目的で、老人會と云ふのも設けられました。日淸戰爭の際、第二の勅語を拜讀しまして、是こそ我々に下された御言葉だ。我々は此場合益々農業の戰爭を勵んで、軍人の戰爭にまけないやうにしなければならぬと、一村心を協せて鋤鍬の戰爭を始めました。向ふの荒地を攻撃しては籔の根を絕し、後の山を突崩しては勝閧を揚げると云ふ始末、夜などは彼方にも、此方にも、篝火が燃えて

論壇の戰士

天高く氣澄む風光人に佳なり

眞の戰爭にも劣りませんでした。さうして我國が終局の勝利を得ました頃には、稻取村も農業の戰爭に大勝利を得て、七十町步の新しい田畑を開墾致しました。」

老翁は獨り積德平和の古君子たるのみならず、火の舌、電の氣を有せる論壇の戰士なり。其缺けたる齒の間より迸り出でし方言交りの言語には、一種不思議の威力ありて、人を壓倒するを覺えき。（下略）

（萬朝報に據る）

一〇 九重の山水

赤坂の御所に菊花を拜觀せるは、去年十一月二十四日、昨日の雨は跡なく霽れて、天高く氣澄みて、風光大に人に佳なる

時なりき。

先づ衞士にゆるされて、表門を入れば御料局あり。また門を入りて、東宮職あり。次の門を過ぎて、坂を下れば、茶園あり。茂樹の間を通りて、仙錦閣の前に出づ。清き池に橋あり。閣の横手に徑ありて、奥庭に通ふ菜とす。菊圃に通ふ間には、紅楓あり、さゝやかなる流ありて、古りたる石橋を架せり。

栞
さゝやか古りたる

やがて第一の菊の園に入りぬ。花壇は三所に分れて、葭簀の小屋をかけぬ。花は見頃は過ぎたれども、なほ七分の匂ありて、黄菊白菊、これはと驚かるゝもありき。そが中にも、「御衣の黄」、「賤機山」、「新月の光」などゝ、忘られぬ名なり。「糸菊」とて、鳥の毛のやうなるがあり。猩々の髪振亂したるが如き、また神仙の髯の如きもあり。尚進むに、紅葉の夕日にかゞやきて、樹の間より見ゆるは、恰も美しき燭を點せるがごとし。小川に落葉して、ちよろ〳〵流に寂びたる橋をわたせる、燈籠の雨に黒みたるなど、何たる風流ぞや。

ちよろちよろ流寂びたる

又松と楓との林をすぎて、廣場に出でたり。道は山の麓につきて、古松に颯々の聲あり。池は平地にありて、斜に橋を見せたり。灣になれる一路は、山と水とに沿うて、竹の門を入りて、小高き丘に登る。道の兩側に熊笹生ひ茂りて、間々紅葉をあしらふ。こゝに若し狩衣召したる殿上人などおはせば、土佐繪の「蔦の細道の圖」は、これなるべし。

あしらふ狩衣

丘の上に洗心亭あり。その前に立ちて、麓の方を見下せば、池

植込

には松と紅葉との影を蘸して、橋は虹の如く見ゆ。小徑を入れば、椿の植込ありて、花の地にこぼれたるさま心地よし。また亭あり。こゝには、五所に花壇の設あり。一番のには「嵯峨の奥」などいへるがあり。二番のには「蘭麝」、「花貝」、「白髪」などいへるがあり。さて三番の花壇に植ゑられたる菊は、一莖に一輪の花をつけたるのみ。その名も、「都の月」、「あけの空」、「延年」、「初冠」、「沖つ波」、「大江山」、「白玉」などゝ優しきが多し。花壇の蔭に進めば、笠松の大地に蟠れるがありて、丘の上の亭は眺望よし。立食の建物もこゝに設けられ、玉座の跡も殘りたり。

また前の花壇の處に戻れば、庭面に小菊を數多植ゑ込みて、その美しさ、花毛氈を敷きつめたるが如し。四番の花壇は一

陪觀月卿雲客

よはひ草

株に千二三十輪の花をつけたる「儀宴の盃」、「赤城」、「雛鶴」などその菊に相應しき名をつけたり。五番の花壇には、中菊の一枝に、咲分の美しき、花紅葉色々なるは西の國の人なんどの好む所なるべし。聚芳亭あり、實に花を眞中に聚めたる小亭、陪觀の榮を荷ひたる月卿雲客の胸には金光燦爛たる徽章つけて、此處に彼處に群れ居つ、君が代の千秋萬々歳天地と共に窮なき齡草の花を愛でたる、その日の如何に莊嚴なりしよ。

坂を下れば、池の畔に出づ。橋あり、山の容、嵐山の俤あれば、麓の水に架せるを、渡月橋と見立つるも面白かるべし。池に沿うてまた上り、鬱蓊たる松の林に入る。なほ進めば、寒香亭あ

り、前に、後に梅の林ありて、樹に千古の苔青し。坂を下りて、また山路に入る。松は千歲の古木、紅葉は幾夜の霜に飽きて、赤きがあり、黃なるもあり。夕陽は木の間を洩れて、谿間の熊笹をてらせば、名も知らぬ鳥の梢馴れて、長閑に語る樣の妙なる、仙境とはこれなるべし。

長閑

こゝに古き老木の、根ばかりを殘せるがあるに、案內する衞士に問へば、「これは昔時奧州街道の跡にして、それなる樹こそ、一里塚ならめ。」と云ふ。まことや、山の容、水の態など、自然のまゝにして、微塵も人工の痕なければ、こゝ一二町が間は京の中とは思はれじ。

人工の痕らし

やがて木の間に水見えたり。落葉掻く男の、靑草の上に憩ふも見えき。憾むらくは、林間に紅葉を焚くの衞士無く、我に石上に詩を題する能あらざりしを。

林間に紅葉を焚く石上に詩を題す

行き行きて丸山のお茶屋の前に出づ。また菊花壇あり、花の名に、「御垣守」「井出の村雨」「柴舟」などいふがありて、その裏手には溫室もありたり。

斯くて園內を大方は見めぐりて、もとの仙錦閣の邊に出でぬ。此閣を「蓮池のお茶屋」ともいふは、池中に蓮の多きより、呼び通はしたる名なるべし。池に二つの橋あり。橋は白木の反橋にして、一橋渡り盡せば、路は山の腰をめぐる。水は鏡のやうに淸くして、峰の松影を倒に映せば、山の根には、舟捨てあり。次なる橋は、山と山と峙ちたる中の水に架りて、幽靜なる

こと、形容するに辭なし。また、山と水とに送られて、もと來し路に戻り、ベンチに憩うて、夕日に映る紅葉の中に、楓林の晩を愛しつゝ歸雲の山に入る景色、鳥の塒にかへる靜けき態など見了りて、衞士に別れ、御所の門を辭して家路につきぬ。嘻菊、我は爾の爲めに、九重の御園に、半日の清興を恣にしき。嘻菊よ、我はその爾のあるがために、少からぬ壽をかさぬるを得たりき。實に爾は、わが爲の齡草よ。

（大橋乙羽、千山萬水）

楓林の晩を愛す

清興

一一　六太夫の晴雨計

晴雨をトす

吾鄉里越後の昔話に曰く、昔年長岡在に六太夫といふ農夫あり、晴雨をトすること神の如く、一も違ふことなし。鄉黨之を信じ、自らも亦信ずること篤し。此事長岡の城主牧野侯の聞く所となり、徵せられて士班に列せらる。

士班に列す

其秋、侯の參觀に隨ひ、東上して江戸に至る。主公別邸に於て客を招きて鴨獵の企あり、その前日晴雨を六太夫にトせしめしに、報じて曰く、「明日晴」と。何ぞ圖らんや、當日盆を傾くるが如く、主客皆濡る。此に於て主侯大に怒り、六太夫を罰せしむ。六太夫縲に死を宥されて、鄉に歸る。

參觀

鄉人其失策せし所以を問ふ。六太夫對へて曰く、「鄉國に在りて晴雨をトするに、いつも彌彦山（越後の名山）に雲の懸れる模樣によりてトせしに、江戸に至りて後、屋に上りて四方を望むも、彌彦山を見ず。因りて止むを得ずして、富士山に雲の

……ことなからんや

趣を異にす

かゝれる模樣を見てトせしに、此の如き大失策を來せり。」と。此話、其信僞は知らねども、以て深く世人を警むるに足る。彼の彌彥山の雲を以て、江戸の晴雨をトせんとする者、世間甚だ多きことなからんや。

（石黑忠悳、況翁閑話）

一二　時計倶樂部

正午の號砲鳴ると共に、會場に着席せるは、官吏、學者、實業家、宗教家、美術家、學生、孰れも時間の貴重を知り、時計の趣味を解する人々にして、老壯男女樣々なる所、普通の倶樂部と趣を異にせり。百人の會員、正午の時刻一分も違へずして來集せるは、流石に時計倶樂部といふべし。やがて發起人演壇に

實踐

立ちて、開會の辭を述ぶ。

「諸君。本倶樂部の趣意は豫て印刷して配布致しました通り、一、會員は約束したる刻限を必ず守る事。二、時間を尊重し自他の時間を浪費せざる事。三、時計に關する知識を交換する事。この三箇條であります。これを本會の規約と定めて、就中第一第二の趣意を會員外の人にも成るべく實踐してもらひたいと存じます。これから唐野君、土岐君が時計に就いて、それ〴〵有益なお話をなさいます。又別室には時計の歷史的陳列がありますから、後で御覽を願ひます。又瑞西堂主人の出品になりました一百の掛時計及び置時計が、午後三時のチンチンチンを、恰も樂師が一百人の歌歌ひを指揮し

て歌はせる様に、毫厘の調を亂さず、一齊に時を打ちますから、これも御聽きを願ひます。これは一寸やさしい様ですが甚だ困難なものださうです。それでは唐野技師を御紹介申上げます。」（拍手、唐野技師登壇）

毫厘

足を駐む

「滿場の諸君。僕が世界の時計製造業視察の爲、横濱を出發したのは、一昨年の九月で、眞直に北米晩香坡（Vancouver）に渡り、それから桑港（San Francisco）、シカゴ（Chicago）、ニウーヨーク（New York）、フヰラデルフヰア（Philadelphia）等を視て、昨年の二月英國に渡り、佛獨を經て、最後の目的地瑞西に赴き、玆に足を駐めて出來るだけ研究して、やうやく一週間前に歸朝しましたが、まづ米國の方からお話致しませう。

「米國で時計製造の大會社が二つある。否、米國の時計製造は

この二大會社の外に無いといつて宜しい。何となれば兩者とも四百萬弗（dollar ($)）の資本金で、職工が二千五百人、毎日二三千個の時計を製造し、互に競爭して新機械を考へ、成るべく廉價に、成るべく正確な時計を造り出す事を勉めて居るのですから、他の小資本の會社は到底成立して行くことが出來ぬ。

右二大會社の一つはボストン（Boston）の近處にある「ウオルソム（Waltham）時計會社」、一つはシカゴの近處にある「エルヂン（Elgin）時計會社」。日本に舶來する米國製の時計は大抵この二會社の製品です。

「米國の時計製造家の特色をお話するには、瑞西と比較するが一番よろしいから、直に本場瑞西に飛びませう。御承知の通り、瑞西は世界第一の時計國で、面積はわが九州位で、人口

は日本の十分の一にも足らぬ山國ですが、國民は農となく、商となく、誰一人時計製造の技術を知らぬ者は無いといふ風で、到る處に公立の時計學校があり、職工、技手に必要な知識技術を教授して居ります。此國の時計業を視て、一番に感ずるのは、分業の發達です。例へば一個の時計が百種の機械から成立つてゐるとすれば、その百種は百軒で別々に拵へてゐるのです。時計製造者は右の百軒から、百種の機械を買ひ集めて、これを組立てるのであつて、極小資本で製造業を開くことが出來る。米國の方は一會社で、機械全部を自社で製造して、自社で組立てるから、資本も非常にかゝります。(尤も外側だけは他の會社で造つたものを用ゐるが)瑞西では

分業の發達 division of labour.

斯く分業になつてゐる故、國民の多くが皆獨立した時計師です。

「私が或町に參りましたところ、この町では市民一人として時計に關係せずに生活して居る者は無いといふ事を聞きました。そこで試に『それではあの靴屋は時計の何に關係してゐるか。』と尋ねたら、『あの靴屋の客は皆時計職人ばかりだ。』と答へた。この市の時計學校は生徒百人ばかりあつて、三年の卒業です。政府でも良職工の養成は十分に奬勵してゐる。米國流と瑞西流とは一長一短はあるが、數千の職工が數人の大資本主の雇人となつて使役されるよりは、小資本の個個が獨立自營の製造者となつて、各分業的にその職を忠實

に勉強する方が、進歩してゐると思ひました。

「まだお話もありますが、今日はこれでやめます。次には土岐君が日本の時計會社のお話をなさいます。」（拍手、土岐氏登壇）

損益償はず

『唯今日本で製造する時計は、第一懸時計、第二目醒時計、第三懷中時計、この三種とも製造する處は東京柳島の精工舍だけで、その他では大概ボン〳〵のみを拵へてゐます。時計の製造は古い事でございますが、純粹の手細工から一歩進んで、機械を用ゐて造り出したのは明治八年が最初で、東京麻布に水車を設けて製造を試みました。しかし損益償はず失敗しました。それがずつと廉價に出來、眞に商品として、外國と競爭し得る樣になつたのは、明治廿一年からです。明治廿一年は日本の時計製造業の紀元元年です。

販路

それから追々隆盛になり、各地に製造處が出來て、三十年頃には、全國で四十餘ケ處になりましたが、販路の研究が不十分であつたため、品物が餘ることゝなつて、一つ潰れ、二つ倒れ、今日では名古屋と東京とばかりになりました。大阪の時計製造會社の如きは、資本金四十五萬圓を投じ、米國の技師を雇ひ、米國の機械を据付けて專ら懷中時計を造りましたが、これも外國品に壓されてつぶれました。今日時計製造に内外の信用を博し、販路も定り、營業の見込の十分に立つてゐるのは、精工舍だけであります。

信用を博す

「名古屋にはボン〳〵專門の製造處が八箇處もあつて、盛ん

に支那などへ輸出をしてゐますが、たゞ低廉を旨として、粗製濫造を厭はぬ爲、どうも信用がございません。精工舍の方は信用第一と心得てゐるらしく、各停車場の大時計の様な最も正確を要するものゝ製造をも命ぜられる様になりました。

粗製濫造

馬力

「時計製造の模様一斑をお話するため、右精工舍の工場を御紹介します。同社は明治廿五年の設立で、工事は時計の種類でいふと、ボン〳〵、目醒、懐中の三部に分ち、仕事の種類で、金工部、木工部、組立部、試驗部の四段になつてゐます。職工四百二十人と一百馬力の蒸氣機關を用ゐて居ります。まづ金工部にはいると、こゝは金屬の打ちぬきが重な仕事で、大小の

歯車、心軸、地板、指針、蓋硝子の縁、目醒の側など、それ〴〵の職工が打ちぬきの機械を使つて拵へてゐますが、こゝで製造の出來ぬのはひげとぜんまいだけです。これも製造して製造されぬ事はありませんが、外國のぜんまい問屋から買つた方が廉いから、これだけは買ひます。木工部に行くとこゝはボン〳〵の側を製造する所で、原料は朴の木に限り、大きな材木を機械で挽き割つて、小い板とし、削るもの、膠着けするもの、漆を塗るもの、松脂を塗るもの、炭磨きするものなど、これも分業です。

膠着

「次は組立室で、數十人の職工が一人づゝ平机に向つて、地板、柱、歯車、心、ぜんまい、鎖、ねぢ、鋲などをそれ〴〵前に置いて受、

持の仕事をしてゐます。懷中時計の組立部へ行くと、仕事が皆細密微妙なのですから、職工は皆一眼の顯微鏡をかけて、一本角の鬼の國へいつた様に見えます。出來れば、試驗室に移して、二日間試驗した上で、賣り出します。この舍の製造高は懸時計だけで、毎月七千五百、名古屋の分を合せると、日本で毎月二萬以上の懸時計が出來ると申します。三四年以來全く懸時計の輸入は無くなりました。内地で賣つて、餘る處は支那、朝鮮などへ輸出します。目醒は毎月二千個を作りますが、まだ〳〵外國品と拮抗の段には參りません。前途は遼遠です。

微妙

前途遼遠

「最後に、先日一寸調べましたが、懷中時計一個で、機械の製造から組立、側仕上、鍍金まで計算しますと、四百六十回人手にかゝります。その他推打、引出打などいつて、暗夜文字板の針さきの見えぬ時、或點を推すか、引くかすると、蚊の啼く位の音で、時と分と二種の音を發する仕掛にした贅澤品もあります。自然打といつてボン〳〵の樣に時間毎に打つのもあります。これ等の手數は大したものです。丁度二時ですからこれで御免を。」（拍手大喝采）

一三　相模灘の落日

秋冬風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かる可しとも思

はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其全く沈み終るまで、三分時を要す。

はじめ日の西に傾くや、富士を始め、相豆の連山、煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩きに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、次第に紫になるなり。」

日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。」

此時濱に立つて望めば、落日海に流れて、わが足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

斯る凪の夕に、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に彳むを覺ゆ。

物あり、融然として心に浸む。喜と云はむは過ぎ、哀と云はむは未た及ばず。

已にして、日愈、落ちて、伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽にして、印度藍色に變ず。唯富士の嶺、舊に依りて、紫上更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く

顧みがち　世をば顧みがちに、悠々として落ち行く。

已にして殘一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。

蒼然　眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黃なるを見ず。偉人の歿後實にかくの如し。

遺孽　日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き孛藍色となり、日の遺孽とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

（德富蘆花、自然と人生）

一四　自然美と人工美

廣大無邊　美には、其種類が種々あるやうでありますが、之を大別しますと、二種になるのであります。それは外でもありませぬ。即ち、自然の美と、人工の美とかう云ふ二種であります。

眼界　自然の美は、即ち、天地、山川、草木、禽獸等に依つて、發現せられた美のことで、又之を天然の美と言つても、差支ないのであります。斯る自然の美は、人工の美に較べますと、廣大無邊の一點に於て、優つて居りまする。何しろ、此眼界の及ぶところに於て、自然の美にあらざる物といふは、無い程でありますから、

宏壯佳麗　辿も〳〵人工の美の及ぶところでは無い。又宏壯佳麗の如

き、人工の美に較べるといふと、一層優つて居ると言はなければなりませぬ。

併しながら、自然の美は其進歩甚だ遲々たるものであります。我々人類の短き壽命から言ふと、殆ど進歩は無いといふべき程であります。僅か六十年や、七十年の間に、自然の美が幾何の進歩をなしましたか。固より千萬年の久しきに渉つたならば、定めて、進化の法則に從つて、多少の進歩をなして居りませう。併し、どうも、自然の美としての進歩は、殆ど我々人類の知り得る所で無い。さうして人類の進歩發展の爲に、自然美は却て破損される傾向が多いのであります。如何なる絶景の高山も、破壞されて鐵道を造ることになり、如何なる名勝も、廣告の爲めに俗了される。其他自然の風景が絶えず破損されて行くのであります。

進化の法則

進歩發展

俗了される

所が、人工の美はどうでありますか。人工の美は自然の美に較べると、大變規模は狹少であるが、其進歩は著しいものであります。希臘、羅馬の時代から今日に至るまで、美術の進歩はどうでありますか。音樂の如きは、十九世紀（century）に於て、大なる發達をなしたではありませぬか。人工の美は年に月に發達して、其進歩極なきものであります。

且又、自然の美は諸處に散らかつて居ります。さうして、その本當に優れたる所は、何處にでもあるといふ譯では無い。名所名所に行つて、之を見なければなりませぬ。又、時の上から

言ひますと、同じ平凡な場所でも、天候の變化の爲に非常な景色を生ずることがあるのであります。或は、大雪が降つた爲めに、平凡な所でも忽ち銀世界に變化して、一點の汚物をも認め得ないといふやうな八面玲瓏の境界となることがあります。さうして又、忽ちにして雲が破れて氷の如き月が現れて來ます時は、實に銷魂に堪へないやうな優美な景色となつて來ることがあります。

八面玲瓏

銷魂

それで、自然の美はあちらこちらにありますが、人工の美に於ては、それらの粹を集めて大成することが出來る。即ち、作家が自由意志に從つて、悉く其見聞した所の粹を拔いて、之を己が技術に依つて發現せしめるのであります。さう云ふ

粹を集めて大成する

自由意志

所から、人工の美の進歩は著しく、次第々々に美の理想に近づかんとしつゝあるのであります。自然の美と人工の美との區別は、主として是等の點に在つて存すると思ひます。

（井上哲次郎、學生寶鑑）

一五　讀書の選擇（二青年の問に答ふ、カーライル）

未だ足下と相知るの機を得ず、足下が讀むべき書に就きて確たる言を爲す能はざるを憾む。唯一事、切に勸告すべきは、讀書を廢するなからんことこれなり。すべて良書は（己が智慧以上の書は如何なる者にもあれ）何程か教ふる所あり。苟も、學ぶあらんと心を開き、意を用ゐなば、直接間接に得ると

欲求
好奇心
旨言

ころ多かるべし。

ヂヨンソンが『己の眞に讀まんとの欲求及び好奇心ある書を讀むべし。』と勸めたりしは、誠に旨言にして、廣く適用すべき教訓なり。此欲求と好奇心とは、之を抱く者が之によりて好果を獲べき人たるとを示すものなり。「欲求は其能力を預表す。」とは、凡て眞率なる人を深く奬勵するに足るの名言にして、讀書に限らず、汎く他事に關しても、吾人の欲求及び努力に應用するを得べし。

天性の預表する眞正の欲求は深く留意すべき大事なるが、欲求には眞僞の區別を辨へざるべからず。醫師は告げて、「己の食はんと欲するものを食ふ可し。然れども假僞の食欲に

あさる

……と一般

傷心

過ぎざる物は、斷じて之を避けざる可からず。」といふ。是眞に然り。夫の輕薄なる漫讀者が、價無き書籍を、彼より是へと飛びあさるは、百害ありて一利なく、此等の讀者は、香料又は糖菓類に對する皮相虛僞の欲求をば、堅實なる滋養物を求むる眞實の食欲(この眞正の食欲は靜に奥深くひそむと雖も、彼等とても之を有せざるにあらず。)と誤認する愚昧不攝生の徒と一般にあらずや。この例證を以て、余、ヂヨンソンの忠言を足下に推薦せんとす。

(増田藤之助、英語文章軌範)

一六　ハンニバル

英雄の成敗は千古傷心のこと少からずと雖、東西古今を通

終焉

じてハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歲の彼が其父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、其終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるにあらざるものなし。彼は二十七歲人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂を享けたる跡なし。大功成なるに垂んとして果さず、羅馬のために窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼人生の慘なる復此の人の如きを見ざるなり。若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども其用兵の器は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家にあらず。文有りて武なき文弱人にあらず。人格上一點の非議すべきところなく、而してその末路かくの如し。これ特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てゝ南北に對峙するものは、ローマ、カルタゴの二共和國なり。天は二國の兩立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛んならず。ロ人は戰鬪を事とする尙武の民なり。カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは羊を驅つて狼に向はしむる如し。況やハンニバルの事に當りしは既に其國が一たび痛擊を受

見兵

けたる後なるをや。本國人の賴むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て强敵に當らんとす。事固より既に非なり。彼豈之を知らざらんや。知つてこゝに出づる、亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。

彼が志を決して Espania イスパニアを發するに臨み、其兵幾んど十萬と號す。然れども、ピレネーの Pyrenea 峻嶺を超え、アルプス The Alps の難路を過ぎ了へしとき、其兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みしときは、見兵僅に二萬五千に過ぎざりしなり。其途上にて兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、「去らん欲するものは去れ。從ふことを樂しむものは來れ。」と。此時に當りて將軍を棄てんとするもの八千人なりきと雖、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其兵は西班牙 Spain. 及びゴール北部諸種の蠻族より組成せしものゝみ、決して夫の愛國心燃ゆるが如きローマ兵の比にあらざるなり。

蕪雜烏合

蕪雜烏合のあらざるよりは、焉ぞよく斯くの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては則ち然らず、其將士は其將軍に對して單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此異樣の兵を以て夫の將來印度以西を統一すべき運命を荷へる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは幾んどこれを壓服せ

潰敗

んとしたるなり。嗚呼此人の外、千古また此人あらんや。獨り人品のみならず、其戰鬪に長ずること亦古今無雙、亞歷山、普烈力、那破翁と雖其上に出づるを得ず。是余の私評にあらず。亦歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と强弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして我は毎に寡兵なり。然るになほ奇戰には謀略を用ゐ、正戰には戰術を用ゐたり。有名なるカンネの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半にも當らざりしにあらずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ゐ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。斯の如き全勝大敗は歷史上實に稀有の事とす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指

疲憊

欵を送る

環數斛を彼の使が本國に齎らし歸りて、之を國會に示せるとき、其國人の驚喜は幾何なりしぞ。此大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは後人の憾むる所なりと雖、其兵やもと甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす。此危道を行かざるも、一方にて伊太利南部の城邑は皆遙に欵を送る勢あり、彼れを捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戰の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ、將軍のために直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、彼既に其得失を知る、必ずしも後人の批議を俟たざるなり。

彼の國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送

並行

りしことなし。十分の金穀を彼に與へしことなし。是彼が十六年間敵國を蹂躙しながら、遂に其成功を誤りし大原因なり。彼の成功を最後に失ひしは本國人民の罪にして、彼の罪にあらず。

斯の如くにして彼は、十六年間自ら兵を他國に募りて其缺を補ふのみならず、其の金穀も常にこれを敵國に取れり。其忍耐の大なる、亦其の智略と並行す。

彼は善く戰へり。彼は巧に外交を操縱せり。然れども其本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚してこれに當たらしむ。嗚呼亦遲し。彼の智勇もこれを如何ともする能はず。しかもなほ此存亡の秋に在つ

小康

釁革

國帑

衰邦に祚せず

て、敵と媾和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武將ならんや。彼をして平時に出しめば、亦治平の良宰相たらん。

其未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戰するや、兵寡く、食竭く。回復の望は懸けて其實弟ハスドルバルが西班牙より援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリアの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を叙せんと樂しみたる其人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて遙に我が營前に現れたるなり。嗚呼人生

悲酸のこと多しと雖、未だ此人の此時の如きものはあらざるなり。

彼が遙に弟の首級を望みたるとき、「我今カルタゴの運命を知れり。」と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此援軍の勝敗に懸かれるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長嘆せざるもの果して幾人かある。「出師未捷身先死」の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も亦豈比するに足らんや。

彼の戰略戰術が人目を眩燿するがために、人或は其の名將たるを知つて其人格を察せず。若し能く之を究めば、其不幸

を悲しむ情轉、深きを加へんぬ。千古傷心の事、實に此人の如きはあらざるなり。

（矢野龍溪、戰時畫報）

一七　山田長政

駿河國なる淺間神社の寶物に、古風の外國戰艦を畫きたる一軸ありて、其端に「奉掛御立願、諸願成就令滿之所、當國生、今天竺暹羅國住居、寬永三丙寅歲二月吉日、山田仁左衞門尉長政」と記せり。艦上には日本風の甲冑を着たる兵士乘り居て、布帆空に高く、旌旗海風に飜り、殺氣艦に滿ちて戰方に酣なるものゝ如し。これ山田長政が鄉社に納めたりし扁額の模寫にして、畫は長政自ら暹羅戰艦を指揮する狀なり。

豪放大志

長政は駿河國藁科鄉の人にして、通稱を仁左衞門といひき。豪放にして大志あり、自ら任ずること高く、常に好みて兵を談じぬ。長ずるに及びて天下を周遊すること數年なりしが、尙一人の知己をだに得ざりき。其友嘗て長政を紀伊侯に薦めんとしけるに、彼笑つて「我が願ふ所は人の主たるにあり、人の臣たるを好まず。」といひて諾ふ色なく、竟に志を得ずして鄉に歸りけるが、つらく思へらく、今や德川氏の天下漸く定まりたれば、苟も立身を欲する者は皆爭うて仕を求む。此時にあたり、武によつて功名を博せんことは殆ど難し。海外に赴かば、或は我が雄志を伸ぶることを得んかと。遂に意を決して密に貿易船に乘込み、先づ臺灣に至り、ついで暹羅に渡りぬ。時に齡二十七歲なりき。

雄志を伸ぶ

その頃暹羅國は、內憂外患頻りにして、國內大に亂れ、殊に隣邦六昆の爲に苦しめらる。長政の到るや恰も暹羅王の兵を出して六昆を禦げる時なりしが、長政暹羅軍の不規律なるを見て、其必ず敗るべきを豫言せり。戰ふに及びて果して其言の如くなりしかば、王傳へ聞きて驚き、召して謀を詢ふ。長政軍略を陳ぶること頗る詳なり。王大いに長政を推重し、直ちに擧げて上將軍となして、六昆の兵を禦がしむ。

諾ふ色なし

長政、令を下して暹羅に流寓せる邦人數百人を招集して、悉く我國の甲冑を着せしめ、更に之に土兵を加へて一萬人を得たり。乃ち日本の援兵至りぬと聲言して、先づ大に敵を威

しぬ。かくて鋒を交ふるに及び、悉く六昆の軍を敗り、其副將を擒にせり。

六昆王敗を聞きて大に怒り、大擧して來り攻む。長政軍を分つて三となし、伏兵を設けて敵をおびきよせ、時分を圖りて挾み擊つ。敵軍大敗し、死傷數を知らず。長政北ぐるを追ひて長驅し、六昆の國都に入りて遂に其の王を擒にす。

長驅

威望及ぶものなし

暹羅王大に悅びて長政の功を賞し、王女を妻せて六昆王に封じ、兼ねて暹羅の國政をも委任す。後又逸比留の地を賜ひて唵普良の爵を授く。是に於て、當時暹羅の內外威望長政に及ぶ者なく、唵普良の名を聞きては四隣擧りて怖ぢ恐れき。」

暹羅王殂して其子の位に卽くや、長政職を辭して六昆に歸る。後幾ばくもなく、奸臣相謀つて新王を弑し、王位を簒ふ。長政大に怒り、直ちに義兵を起さんとせしが、却つて奸臣等に謀られて毒殺せられき。

六昆王となりて榮華を極めし頃にも、長政は曾て祖國を忘れず、屢〻方物を幕府に獻じて恭順の意を致し、我が商賈の暹羅に渡る者あれば懇ろに之を保護し、特に居留地を授けて其便宜を計れり。されば我が商賈の海を超えて行く者年と共に增加し、竟には日本街といへる別廊をなすに至りきといふ。

（坪內雄藏、中學新讀本）

一八　うれしさ

夜は更けたり、あたりは靜なり。音するものは庭の落葉の風に舞ひ狂ひて、かさ〳〵と鳴るのみなり。ひとり火桶をいだきて、燈の下にうづくまりながら、思ふとも無しに、さき〴〵の事をおもふ。

うづくまる

雨ふらんとする空のいと暗き夕、寒風に吹き送られながら、長々しき路を盡して、やう〳〵吾が家の門を望み得るあたりまで歸りつきたる時、尾をふり〳〵狗の馳せ出でゝ悦び迎へたる、狗もまことに嬉しかるべく、主もまことにうれしかるべし。

うし辛し

憂しともおもひ、辛しともおもひながら、その事を爲しはてたる後、浴みしたる時の嬉しさ。

昔を今にくりかへす

久しく讀まざりし書をひき出して、心ゆるやかに見る折から、情深かりし人の文の挾まり居たるに、眼とまりて、十年ほどのむかしを今に繰り返し見たる嬉しさ。

蟲のためにいたく衰へたる樹を、枝など截りつめて、活かさんものと念じけるに、多く芽をふき出して、勢よくなりたるを見たる嬉しさ。

長き病のやうやく癒えたる時、椽端近くゐざり出でゝ、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たる嬉しさ。

親しき友の子孫などの、美しう、賢う生ひ立ち行くを見る嬉しさ。

むくつけき人の、思のほかに親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたる嬉しさ。

みづから種子を下したる草の初花咲きたる嬉しさ。

雪の夜の淋しきに、雪の日の旅のをかしかりし往時などおもひ出でながら、ぬるき茶をのみ〳〵、句を案じ得し嬉しさ。」

自ら克たんとはおもひながら、慾の抑へがたさに克つあたはで、歳月經たることを、一日遂に思ひきり得て、危き戰に勝ちたる心地したる嬉しさ。

自ら箒を執りて清らかに庭掃きたる後、直に落葉の一ひら二ひら落霜紅の一顆二顆落ち散りたるを見ては、流石に惱ましく思ふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に箒目の

むくつけし　むくつけき
やさし　やさしう

あるがため、葉の散れるも實の散れるも、おもむきをなして、

をかしともおもひなされける　をかしとも思ひなされける

將棊などして、勝つこと難きには定れるものながら、尚負けじ魂に思を苦しめて、打案じたる末、常の我には立ちまさりたるよき謀を思ひつき得て、遂に勝ちたるいと嬉し。負けたれど今のやうなるおもしろき謀にかけられたるなれば、口惜しからず。」など、敵に云はれたるいよいよ嬉し。

負けじ魂

七つ八つばかりなる美しき兒に、をぢさん〳〵といひて親しまれたる嬉しさ。

一月一日、父母兄弟姉妹妻子皆うち揃ひたる嬉しさ。

（幸田露伴、長語）

一九　生物

うつろふ　物界　造化　宇宙

生物は世界の花なり。彼等は生れて死せざるを得ず。其齢を云ふ、何ぞ巖石と比す可けん。何ぞ彼等のはかなきや。譬へば花の散り易きが如し。散らざる、うつろはざることを云ふ。幹根の花にまさること萬々。しかも花は是草木の極美ならずや。生物は物界の花なり、うつろひ易き花なり。

然れども亦生物は皆造化主なり。樹木の種子は水土を造化して樹木となす。桃李の生活は桃李の形なき所より、桃李を造化し出すに在り。犬馬の生活は犬馬の形なき所より、犬馬を造化し出すに在り。宇宙に彼所謂造物主なる者ありや否やを知らず。唯知る、生物の各自皆造化主なることを。

理想界　實現界　經驗界　理想の實見

吾人は有自覺的、有理想的生物なり。吾人の理想的生活は、理想界を造り出してこれを實現界となすに在り。即ち此經驗界に、此現象界に理想界を造り出すが吾人の職分なり。理想界の造化主たるが、吾人の眞個生活なり。吾人みづから造化し出すにあらずば、吾人の世界に何時か理想の實現を期す可けん。吾人を措いて誰か此人界に於ける理想の造化主たる者ぞ。手を束ねて「天よ之を成就せしめ給へ。」と叫ぶとも、天は答へざるべし。耶蘇基督よ、阿彌陀佛よ。」と叫ぶとも耶、蘇何かせん、彌陀佛何かせん。理想を實現する責任は、天にあらず、

神にあらず、吾人にあり。吾人の働くことに於て、働く者を神といはずば、如何なる神によりてか、能く理想を實現せしめん。生物は物界の花、理想的生活は生物界の花なり。

花はうつろひ易し。生物は死し易し。曾て吾人の理想を實現せしめたるものも永久なる能はず。吾人の曾て正義と見、善美と見て造り出したるものも、今は既に老朽して更に改造せられんことを要す。改造して更に改造せざる可からず。空間時間を以て裹まれたる吾人の此世界に、吾人の成就し得る理想は到底するに圓滿なる能はず。故に改造は窮なかるべし。吾人の世界に永久のものあるなし。たゞ永久なるは進んで止まざる理想的改造のみ。此無窮の理想的生活こそ、吾

老朽

人の眞個の生活なれ。

二〇 我國の風光

國民の特性は初よりその人種に固有なるものもありといへども、またその住處の地勢氣候によりて馴致せられ、變化したるものも少からず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が東洋に、西洋に相分れて、寒猛柔剛匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日、北地の嵐、山海さまざまの風物がこれを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接するの國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。さらばわが國民の特性

（大西祝、論集）

馴致

匹を異にす

を論ずるに當りては、日本の自然についても觀察を下さゞるべからず。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於る伊太利、瑞西の如し。氣候中和にして山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず。雄大魁偉なる大陸的風致に乏しといへども、至るところ優麗嫻雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀曲浦浪靜に砂滑かなり。瀨戶內海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日、夕日に移らふ景趣は應接に暇あらず。陽春櫻あり、晚秋菊あり、初夏の楢にかかれる藤波は紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森鴉の聲暗き陰に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは、怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穩和なり、これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化の致すところなるべし。

日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を產す。國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艷ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに稟質猛烈ならずして穩健に、執着せずして洒脫なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

瘴烟毒霧

優麗嫻雅

縫うて進む

應接に暇あらず

愛賞に他事なし

二一　國　船

雲に聳ゆる高山も、登らばなどか越えざらん。空を浸せる海原も、渡らば遂にわたるべし。我秋津洲は茜さす東の極、離れ島、譬へば海の眞中に、浮べる船にさも似たり。二萬方里の船の中、四千餘萬の乘組あり。船の主の指揮を受け、文明海に進め行く、水師楫取多かるも、我等も舟子の一人なり。船のゆくては和田の原、八重の潮路の遠ければ、はやて逆捲く時もあり、高浪荒るゝ折もあり。舟子の術を習はずば、はやて高浪凌ぎ得て、おもふ港にいかで著くべき。

（藤岡作太郎、國文學史講話）

茜さす　水師楫取　はやて

二二　ウエニスの商人　The merchant of Venice. Shakespeare, 1596

（梗概）ウエニスの猶太人シャイロック、多年高利貸を業とし、刻薄の手段を用ゐて巨萬の富を作り、全市民に惡まる。アントニオは若き豪商にして俠氣あり、シャイロックを惡むこと甚しく、屢、稠人の中に面罵す。シャイロックこれを啣み、陰に報復の機を待つ。アントニオの友バッサニオ、貴族の女ポルシアと婚せんと欲して資無し。三千金をアントニオに借らんと諮る。アントニオ盡く資を貿易船に放出して餘金無し。遂に代つてシャイロックに請ふ。シャイロック、アントニオが肉一封度を抵當として之を貸す。バッサニオその金を以て仕度を調へ、首尾よくポルシアと婚す。婚儀の半に、アントニオより急使あり、その船盡く難破し、返金の期既に過ぎて、アントニオが命は猶太人の手中にありと報ず。バッサニオ色を失ひ、即時償金を懷にしてウエニスに急行す。到ればアントニオ既に囹圄の中にあり。バッサニオ乃ちシャイロックを訪ひて示談すれ

ども應せず、たゞ約束の肉塊を得んと主張す。裁判の日既に定る。ポルシアの從兄に法律博士ありベラリオといふ。ポルシア之れに諮りてその意見を聽き、かつ判官の制服を借り、自ら判官となりて、急ぎウエニスの法廷に赴く。ウエニスの法廷にはウエニス公爵を始め議官列席して、審問正に開かる。

法廷の場

ウエニス公「いかに、アントニオは出頭し居るか。其方は、石の如き無情の敵、毫厘も仁心なき人非人と對決致さねばならぬぞ。」アントニオ「閣下にはシャイロックの手ひどき申立を和らげんと色々の御配意、有難く感謝致します。しかし、かれの害心の屆かぬ處には、一歩も出られぬ身にござりますれば、はや存分の暴虐を受くる覺悟にござります。」

人非人

存分の暴虐

（シャイロック登場）

公、誰ぞ、猶太人を法廷に呼べ。

公、やよ、シャイロック、そちの申立は、よも本心ではあるまい。イヤサ、裁判決定の間際に臨んで、急に慈悲惻隱の心を見せようといふのであらう。我々一同は其方より同情ある返事を待ち設くるぞよ。

シャイロック「畏れながら、私の了見は既に御承知の筈でござります。相手方から差入れた證文の通り、私に於て權利ある抵當をば是非ともに受取る決心、それを閣下がお妨げあつては、乍憚市政の大事でござります。何故三千兩といふ大金を棄てゝ、狗も喰はぬ肉一片を欲しがるかと御尋ねなされますな。まづ一時のムラ氣と申しておきませう。私の宅で一疋の鼠に苦しみ、之を殺すに千兩の毒

慈悲惻隱

了見

ムラ氣

藥を費つたとしたら、どうでございます。勝手ではございませぬか。こんな算盤に合はぬ事をするも、一時のムラ氣。何とはや御合點がいかれましたか。」

バッサニオ「ウヌ、その樣な答辯で了解が出來るものか。」

シャ「御氣の毒だが、お前さんの機嫌を取る義務はない。」

とやかく

ア「バツサニオ君、君の論敵は冷酷なる猶太人だ。君にして猶太人たる彼の心を和らげ得るならば、君は濱邊に行きて海の潮に向ひ、その漲る高さを減ぜしめる事も出來よう。どうか、もうシャイロックに兎や角と言つてくれ給ふな。私には一刻も早く判決を受けさせ、シャイロックにはその了見通りにやらせてくれたまへ。」

バ「ではシャイロック、三千兩の代りに六千兩やらう。」

シャ「いけませぬ。六千兩の一粒づゝが六兩になつても、否でございます。證文通りに肉塊を貰ひませう。」

公「こりやシャイロック、他人に少しも恩惠を施さぬ者は人からも親切は受けられぬぞよ。」

シャ「とんでもない事。閣下のお邸には、奴隷が大勢、驢馬や犬の樣に使はれて居りませう。皆閣下が金を出してお買ひなされた代物だ。處で私が閣下に向ひ、『彼等を解放なされませ、』『令孃方の婿に遊ばせ』、『仕事を免して閣下の柔い寢床に休ませておやりなされ』と口を出したら、何とございますか。『馬鹿を申すな。奴隷は此方の物だ。手前の知つた事でない。』と仰

代物

反古紙

せある、全く以てその通り、アントニオの肉一片は、私が大金を出して買つたもの、閣下がこれをお拒みあつては、ウエニスの法律は反古紙だ。さあ〳〵、お早く判決を願ひます。」

公「此件を裁判の爲に、法學博士ベラリオを招いておいたが、いかゞ致しをるやら。」

（この時、博士の手紙を携へたるもの來れりと報ず）

公「その使者をこれへ呼べ。」

バ「アントニオ君、氣を慥に持つてゐたまへ。命にかけても君に一滴の血も落させはせぬから。」

ア「いや、一本の樹の果實の中でも、一番弱いのが一番早く落ちる。僕は一群の羊の中でも、死ぬるに最も適した病羊と見える。」

破產

信仰がぐらつく

（アントニオの僕グラシアノの新婦ネリッサ裁判書記の扮裝にて登場）

Gratiano Nerissa.

公「足下はベラリオ博士の許より來られしか。」

ネリッサ「左樣でござります。」

公「足下はベラリオ博士の許より來られしか。」

バ「これシャイロック、貴樣は何故そんなに小刀を研ぎすますのだ。」

シャ「そこの破產屋さんから、抵當物を切り取る爲さ。」

グ「殘忍なる猶太人。おれは貴樣が立派に生きてゐるのを見ると、おれの信仰がぐらついてくる。世の中に正義の有無が疑はれてならぬ。かのピサゴラスと同じく、畜生の靈魂は人間の體軀に入り込むといふ奇說を信じたくなる。貴樣の靈魂はもと狼のであつたのだ。」

シャ「何となりと言

はつしやれ。いくら悪口をいつても、おれの握つてゐる證文の中から、アントニオの調印がぬけ出る氣づかひは無い。これさへありや、法律が味方をしてくれるから。」

法律が味方

公「ペラリオは此手紙を以て、若き博士を當法廷に推薦してゐる。してその博士は何處に居るや。」　ネ「すぐお次に控へ、閣下の御許を待つて居ります。」

公「誰ぞ博士をこれへ御案内致せ。」

（バッサニオの新婦ポルシア、法學博士の制服にて入り來る）

公「お手を。貴下はベラリオ氏の許より來られしか。」

ポルシア「左樣にござります。」

公「善くこそ〳〵。して當事件の大要は御聞きあつたであらうな。」

ポ「略々承つてをります。早速ながら原被兩告に御引合を願ひます。」

公「被告アントニオ、原告シャイロック、兩人とも前に出よ。」

ポ「其方がシャイロックと申すか。」　シャ「はい、シャイロックは私でござります。」

ポ「其方の訴は實に奇妙な訴ぢやな。併しウエニスの法律上、不當な主張ではない。して、アントニオとやら、原告の提出する證文は、其方の差入れた證文に相違ないな。」

ア「如何にも相違ござりませぬ。」

ポ「然らば、猶太人は被告に慈悲をかけて遣らねばなるまい。それ慈悲は天よりふりそゝぐ甘露の樣なものぢや。受けるものを幸福にし、與ふる者をも幸福にする。我々は始終神に慈悲を祈る、取りも直さず、この祈は、われもまた他人に慈

原被兩告

甘露のやうな

悲を懸けねばならぬとの教では無いか。正義公道のみを以て裁判せられたら、我等人間は、一人も神の救に與ることは出來まい。況んや偏に法律を定規として、正當のみを言ふときは、この世からして、犯罪者ならぬものは一人もあるまい。こゝの道理を辨へて、其方の要求を、チト和らげてはどんなものかな。」

シャ「いや、解りました。詰まる處、私が曲つた事をしたら、私が其責任を受けるまでの事。無理は申しませぬ。常法通りの御裁判を願ひます。」

ボ「して、アントニオは件の返金が出來ぬのであるか。」

バ「いえ、金額はこゝに、こゝに用意致して居りまする。私は

三千兩の二倍、いや望みとあれば、五倍十倍、存分に差出さうと申してをります。それをきかざる彼が內心は、何の正義どころか、惡意兇心に相違ござりませぬ。何卒判官の御意見により、少しは法律を枉げても、此樣な惡漢に制裁を御加へあらんこと、天下の大義の爲めに願はしく存じます。」

ボ「いや、それはならぬ。確定されたる法律を變更する力は、何人にも無い。かゝることが先例となつたら、將來の國政に如何なる錯誤を生ぜぬとも測られぬ。」

シャ「名判事樣〳〵、博學な名判事樣、ダニエル樣の再來だ。」

ボ「證書をこれへ。」

シャ「はい、これでござります。」

ボ「どうぢや、シャイロック、三千兩を三倍にして拂はうと

惡意兇心制裁を加ふ

再來

いふが。」　シャ「いけません、天に誓つていけません。」

ボ「さ、そこが慈悲ぢや。元金の三倍を受取つて、拙者に此證書を裂かしてくれぬか。」　シャ「いけません。證書の意味通りに拂が濟めば、貴下に裂かせませう。人間の舌では私の意志は動きませぬ。」　ア「何卒もう御配慮を御止め下さいまして、速に御判決を願ひ上げまする。」

ボ「其方が斯く覺悟した上は、シャイロックの小刀を受けるために、胸を露はさねば相成るまい。法律の明文のみならず、精神から見ても、十分その義務がある。」

シャ「名判事様〳〵。胸だ〳〵。證文にもさう書いてある。『拙者が心臟に最も近き處にて』と書いてある。」

ボ「して、其方は肉塊を量る秤を用意してをるか。」

シャ「ちやんと用意してをります。」

ボ「アントニオ、その方は何か言ひ遺す事は無いか。」

ア「はい。ではバツサニオ君、最後の握手をさせてくれたまへ。隨分御息災で。我輩が君のために災難に陷つたのを悲んでくれたまふな。何事も運命だ。どうぞ君の令閨へもよろしく傳へて下さい。そして我輩が君の親友であつた事を判斷してもらつて下さい。」

バ「アントニオ君、僕は、もう妻も何もいらぬ。君を救ふ事が出來たら、妻の命もこの世界も喜んで棄てゝしまふ。」

シャ「ひどい事をいふ人間だ。——サア判事様、早く御宣告を

願ひます。」

ポ「然らばアントニオの肉一封度は汝の物である。法廷これを認め、法律これを許す。彼の乳の下よりその肉を切り取つてよろしい。」

シャ「サア宣告だぞ、覺悟しろ。」

（シャイロック小刀を揮り閃かして、アントニオに近づく）

ポ「猶太人、暫く待て。この證書には、アントニオの血一滴をも汝に與ふるとは認めてないぞ。證書通りに一封度の肉を切り取るのは、汝の權利ゆゑ差支はないが、若し一滴たりとも基督教徒の血を流すことあるに於ては、國法に從ひ、汝の土地家屋財産一切を、ウエニスの政府に沒收せらるゝぞよ。」

グ「えらい〳〵、成程公平な判事様だ。」

シャ「そんな法律がありますかね。」

ポ「有るか無いか明文を見たらよからう。その方は正當權利をやかましく請求したによつて、峻酷なる正當が報つて來たのぢや。」

シャウム。」

ポ「さあ正當を取れ、權利を取れ。」

シャ「そ、それでは先方のいふ通りに致しませう。三倍の金額で許してやりませう。」

バ「その金はこゝにある。」

ポ「いや〳〵、猶太人にはあるたけの正當を行はねばならぬ。肉一封度の外に、彼の受くべきものは無い筈ぢや。」

グ「名判事様〳〵、若い名判事様。」

ポ「さあ、肉を切る支度を致せ。血は一滴も流してはならぬ

ぞ。又キツチリ一封度だけ切り取らねばならぬぞ。それより一厘一毛多くても少くても、ウエニスの法律によつて汝の生命は無いぞ。」

グ「それ見ろ。猶太人ダニエル様の再來だらう。」

ボ「何故其方は躊躇してをる。さあ早く償を取らぬか。」

シャ「では元金だけでこゝを去らせて下され。」

ボ「いや、公の法廷で拒んだ上は、何處までも證書通りより外はならぬ。」

グ「ダニエル様〳〵、も一つおまけにダニエル様。」

シャ「元金だけも拂はぬのか。え、呉れてやるわ。乞食め勝手にしろ。」

（シャイロック退場せんとす）

ボ「猶太人待て。法律はまだ其方に用があるぞ。ウエニスの法律に從へば、『玆に外國人あつて、直接或は間接の謀を以て、ウエニス市民の生命に危害を加へんとしたる場合には、其者の財産の一半は、その危害を蒙らんとしたる者の所有に歸し、他の一半は政府に沒收し、而してその犯罪人の生命はウエニス公爵の意見によつて處分す。』といふ明文がある。其方の行爲は正しくこの條文に該當してをる。早く公爵の足下に伏してお慈悲を願ふがよいぞ。」

明文　該當

公「我等基督教徒の慈悲によつて、其方の願に先だち、生命だけは赦免して遣はす。其方の財産の半分はアントニオの

所有に歸したのであるが、他の半分は其方改心の模樣により、特別の詮議を以て若干の科料に換へても遣はさう。」

科料

ボ「左樣、國家に沒收する分は罰金に換へる事も出來ますが、被害者に分つべき分はさう參りませぬ。」

シャ「いゝや序に生命も取つて下さい。私の家を支へる柱を取るのは、私の家を取るのと同一です。生命の綱の財産を取られるからは、寧ろ生命を取つて貰ひませう。」

生命の綱

ボ「アントニオ、其方は彼に如何なる慈悲を加へる積ぢやな。」

ア「公爵閣下を始め、列座の方々にお願ひ申上げます、彼の財産の半分に換へるべき罰金もお免し下されまする樣。さて私は他の半分をシャイロックから貰はなくても

滿足でござります。唯件の半分を私が保管致、かねて彼の娘と結婚致してをる紳士に渡してやらうと存じます。又シャイロックにはお上の御慈悲の條件として、只今即時に基督教信者と相成り、その死後は、右財産の全部を、件の夫婦のものに讓り渡すといふ遺言書を此法廷に於て認めます樣。これが私のお願でござります。」

Jesus Christ

公「成程、では左樣いたして遣はさう。否を申すに於ては今迄許した事も皆取消にいたすぞ。」

ボ「猶太人、どうぢや、承諾か。」

シャ「はい。」

ボ「(ネリッサを顧み)「遺產證書を認めて下さい。」

シャ「チト氣分が惡うなりましたから、何卒もうお暇を願ひ

上げます。證書は後からお送り下されば調印致しますでござります。」

公「然らば退れ。屹度調印致せよ。」（シャイロック退場）（下略）

決議案披露

二三　ペリー紀念彰誼會に於ける大隈伯爵の演說

「府下の有力なる教育各團體の委員諸君が發起せられたるペリー紀念彰誼會に於て、特に北米合衆國の五十年の好意に對し謝意を表するため、決議案を披露して諸君の同意を得るといふ嚴肅なる式場に於て、予の意見を述ぶるの機會を得たるは、予の最も光榮とする所なり。

長夜の眠を覺す

眼を放つて

締結

布教

「寛永の鎖國以來二百餘年ののち、安政元年に至り、米國コモドル、ペリーによつて日本國民は始めて長夜の眠を覺されたり。眼を放つて世界の大勢を見れば、歐米諸國はこの二百年間に、驚くべき進歩をなし、流石の日本國民も、自ら文化の低きを自覺し、こゝに始めて彼の長を採り、我が短を補ふの方針を定むるに至れり。この時に於て、米國は日本と條約を締結するや否や、直に多數の基督教傳導師を送りしが、當時日本は外教禁制の時なりしを以て、爾來二十年間は少しも布教をなす能はず。その代に彼等は教育に從事せり。日本人もまた悦んで之を學び、重に語學を傳習せり。予も其一人なりき。

「かくて益、彼の事情を知るに及び、愈、彼の長を採らんとの意切なるを加へ、こゝに於て、その以前幕府の建てし開成所は、直に明治政府に於て再興せられ、昌平黌は一轉して大學となり、別當松平春嶽翁の精勵によつて、今日の帝國大學の基礎を成すに至れり。當時顧問として雇はれしは、實にフルベツキといふ米國の善良なる傳導師なりき。次に我大學の總長となりて學制組織及び教育に盡瘁せられたる、亦米人モルレー氏その人なり。

伯は是より、學制も、教育も、はた物理も、化學も、歴史も、文典も、米國を主とし、遂にナシヨナル、リーダーまで採用したる次第より、今日の伊藤侯等が、フルベツキの建議に基きて、明治四年に學事視察の使命を帶びて、まづ米國に赴きたる顚末を述べ、北海道の札幌農學校も、大阪の同志社も、米人の手を藉りて創立せられ、其他女子の教育等、米國人は教育上のあらゆる方面に向つて、盡瘁したる次第を縷說し、

「今日の日本文明、何に依りて根蒂を固めしかといへば、即ち文明的教育の普及發達にして、此文明的教育の總べてに向つて、最も力を盡されたるは、米國人最も多しとす。就中吾人の忘るゝ能はざる偉大なる人物を擧ぐれば、第一にコモドル、ペリーに指を屈せざるべからず。

「ペリーの人物は實に北米合衆國を完全に代表するものな

顚末　盡瘁　根蒂を固む

堅忍不拔

りと信ず。北米合衆國は平和と正義とを主義とし、人道的博愛主義を以て主義とせる文明國にして、ペリーは堅忍不拔なる意思を以て、この主義を服膺し、萬里の波濤を蹴て浦賀に來り、非常の熱誠と忍耐とを重ねて、我國民を長夜の眠より覺醒せしめたり。ペリーの後嗣者ハリス Harris も亦、未だ條約の何者たるを知らざる幕府に、友誼的助言を與へて、各國と締結せしめたる大恩人なり。

侵略的野心

とて、一轉して、我國は昔より開國を以て根本の主義とし、二百有餘年の鎖國は、ジエスイツト宗の侵畧的野心を防がんとしたる一時の變態に過ぎずと論じ、

「我國と米國とは政體こそ異なれ、自由を貴び正義を愛し、平

人道的精神

和を重んずる人道的精神に至つては、彼のアングロサクソン人種とともに、全く同一なり。是遠くは我國民種の特質にもよるべけれど、最も有力なる近因は、全く教育の力といはざるべからず。この教育のあらゆる方面に向つて、滿腔の同情を以て、殆ど五十年間、米人の盡されたる好意は、吾人の忘れんと欲して忘るゝ能はざる所なり。勿論我國が恩惠を被りたるは、獨り米國のみならず、英佛獨の諸國が、或は海陸軍の上に、或は法律制度の上に、或は學術、殊に工業醫學の上に貢獻したる恩惠に對しては、感謝の意を表せざるべからずと雖も、開國の以前より今日まで、五十年一日の如く萬事萬物に對して、慈母の如き懇切周到なる教育、寧ろ鞠育の世話

滿腔の同情

貢獻

懇切周到

を盡しくれられたるは、米國といはざるべからず。

干戈相見ゆ

「いまや我國が世界の強國たる露と干戈相見えつゝあるは、正義の爲、平和の爲、世界共同の利益の爲に戰ひつゝある次第にして、この正義平和の觀念は、我國固有の特性とはいひながら、斯の如き偉大なる勃興を見るに至りたるは、亦米國民の正義平和の觀念の反射なりと信じて疑はざる所なり。」

反射

先進國

「我日本が歐米の先進諸國に負ふ所の責任義務の偉大なるを自覺すれば、此戰爭の結果をして、世界の平和、世界共同の利益のために、多大なる效果あらしめざるべからざるの念愈切なり。詳言すれば、日本が五十年間、米國を始め、諸先進國より得たる感化力の發展より、陸海の軍隊を率ゐて、世界の人道平和の爲に戰ひつゝあるは、我東洋國家の獨立を保持する爲とはいひながら、亦間接に先進國に對する謝恩の微意といはざるべからず。殊に米國に向つて、米國の代表者コモドル、ペリーに向つて、最も深厚なる感謝の意を表せんと欲するものなり。」

（時事新報の記事に據る）

赤手

言下に答ふ

二四　カーネギーの青年時代

倫敦「デーリイ、ニユース」の記者嘗て米國の大富豪アンドリユー、カーネギーに向ひて、「人若し赤手巨萬の富を作らんと欲せば、如何なる資格か最も必要なる。」と。翁言下に答へて曰はく、「第一は貧家に生るゝことなり。銀の匙もて飲食するも

狼の如き貧乏

顔に血の色なし

のは、到底富豪たるの資格なし。極貧極苦に身を曝し、死活を爭ふの窮境に立ち、殘酷さながら狼の如き貧乏に追はれて、一切家庭の和樂を咬み破られ、一家離散の慘狀に陷り、如何にもしてこの狼を追ひ拂はんとの大決心を奮ひ起すものにあらざれば、到底富豪とはなり得べからず。人間此境に臨んで、始めてこの全能力を發揮し得べきなり。」と。

實にカーネギーの幼年時代は、暗憺極れるものなりき。翁が十一歲の時、一夜遲く父は外より歸り來りしが、顔には血の色もなく、グタリと椅子に懸けながら、その妻に向ひていふやう、「今日も一日驅け廻りたれど、仕事はなかりき。偶、あれば到底勞力にも引き合はず。これにては所詮一家も支へ難けれ

命限り根限り

身代を疊む

天涯茫々

ば、子供とも相談の上、何とか始末せざるべからず。」と。此樣子を目擊したるアンデーは、子供心にも悲哀痛傷の情に堪へず。此時より命限り根限り働きて、貧の神を我家の戶口より逐ひ拂はんと決心したり。

カーネギーの家は機屋にして、手織機數多を据ゑて相應に營業せしが、近年機織器の發明の爲に、追々衰微の悲運に陷り、一家四人飢餓に迫りて、遂に身代を疊み、故鄉を後に天涯茫々たる米國に航せり。かくて僅なる知邊を便りに、ペンシルバニア州のピッツバーグに落著き、アンデーは翌秋より、一週若干の給料にて、同處の木綿工場に雇はれたり。仕事は絲捲にて、朝は日出前より夜は日沒後まで、晝飯後四十分の外

休憩の時なく、宛然機械の如くに役せられたれども、アンデーは心に決する所あれば少しも意とせず、熱心にその職務を行ひ、翌年は擢でられて汽罐の火夫となりぬ。こは十三歲の少童に取りては、頗る大役なり。火の焚き方、水の注ぎ方、少しにても注意を懈らば、工場の大機械は忽ち調和を失ひて、微塵に破壞すべし。されば流石のアンデーも、全身の神經を之に集めて、夢寐猶安んぜず、夜半俄に床より反ねおきて、汽罐の熱度計を視るの態をなし、火夫の職も無事に務めて、翌十四歲の時、市の電信局の信使となれり。アンデーが此時の喜悅は、比するに物なし。「地獄より極樂に轉じたる懷なりき。」といへり。彼は信使たる傍、零碎の餘暇を利用して電信の技術を學び、二年を經て技手となりぬ。當時米國全體の電信局中、單に耳によりて電文を解し得る者は、カーネギーの外に只一人のみなりきと。以てその熟練を知るべし。翁がその立身の登龍門ともいふべきスコツトの會社と關係の緣を結びしは、この電信技手の時代なり。

大役
夢寐安んぜず
零碎
登龍門

カーネギーが幼年時代に於ける、かかる慘憺たる苦境の中にも、流石に多少の慰藉はなきにあらず。彼が母は敬虔にして慈悲深き性なりしかば、蜜の如き甘き慰藉と、光の如き力ある奬勵とは、綿の如くに疲れて、呼吸も絕え〳〵にて工場より歸り來るアンデーをして、翌朝は旭の如き希望を以て

慰藉
蜜の如し
光の如し
綿の如し
旭の如し

忙中の餘暇

勇み躍りて再び工場へ驅け向はしめたり。

今一つの樂は、忙中の餘暇を讀書に費すことなりき。彼は幼少より叔父に就いて讀書を學び、母にも奬められたれば、斯る苦業の中にも讀書の樂を變ぜず。當時市にアンダーソンといへる人あり、その藏書を無料にて借覽せしめしが、アンデーは最も熱心なる借覽者なりき。主人に對するカーネギーが深き感謝の念は、到底我等の想像すべきにあらず。翁が今日其巨大なる寄附金の大部分を圖書館に投ずるは、當時受けたる讀書の利益といふ深き印象と、一つは恩人アンダーソンの陰德を永く紀念する爲なりといへり。

業務に忠實熱心なることは執業者の成業に最も缺くべからざる事なれども、業務の餘暇を自己の進步の爲に用ゐるものは、遂に大成功を遂ぐる能はず。カーネギーの如きは、

困憊

困憊極りたる僅の時間をも利用して、進步の原動力を、貴き讀書に用ゐたるものといふべし。

二五　我國の工業界

工業の利益あるはいふまでもなし。凡て一國生產の原料は、國民がこれに工を加ふるに從ひて、益々其價値を增す者にして、馬の蹄鐵とすれば僅に一圓の價を有する鐵の原料も、これを小刀とせば、二十圓の價を有するに至るべし。かくの如く、工業の發達すると共に、同一の原料も數萬倍の價を有

せしむることを得。亦以て工業の發達と吾人の福利とが、如何に大なる關係を有するかを知るべし。

士農工商賤視

思ふに我國の工業が、急速の進歩をなし始めたるは、維新以後の事にして、その以前にありては、士農工商の階級の下に賤視せられて、改良進歩の見るべき者もなく、至りて微々たる有様なりき。從ひて當時の社會に於て、工業者は最卑賤なる境遇に見捨てられ、唯武士に必要なる甲冑刀劍の武器を製作する者のみ、稍重んぜられたるに過ぎざりき。然るに維新以來、海外との交通年を逐うて頻繁に赴き、歐米の諸國に於て、學理を基礎として製造せられたる精巧緻密なる大小の器具器械は、續々として輸入せらるゝに至りたれば、我國

供給を仰ぐ

從來の劣等なる工業は、いかで之に匹敵し得らるべき。文明の器械を利用し、我國をして世界の進運に伴はしめんには、萬事彼の供給を仰がざるを得ざる有様なりき。

こゝに於て先輩の士、我國内に於て工業を振興するの必要を感じ、一面には工業の教育に力を致し、工科大學起り、工業學校創り、各種の工業教育、また各地方に漸々發達し來りぬ。又他の一面に於ては、實地の工業に奬勵を加へ、保護を與へたる結果として、各種の工業は次第に勃興し、東京大阪を始とし、各地方に大工場は設立せられ、煙突天に聳え、煤烟空に漲るの壯觀を呈するに至れり。

かくて我國の工業は漸次に進歩し來れりといへども、發達

日尚淺し

堪能なる技術家老練なる職工

遜色なからしむ

の日尚淺きを以て、其程度頗る幼稚なるを免れず。殊に工業の發達に最も必要なる實地の經驗は、短日月の間に積み得べきにあらざるを以て、堪能なる技術家、老練なる職工の養成せられたる者尚未だ多からず。されば精巧なる製作品に至りては、その大部分の供給を外國より仰がざるを得ず。現に鐵道の如きも、材料物品の四割は、外國よりその供給を仰ぐといふ。かくの如き有樣なるを以て、我工業をして歐米諸國に對して遜色なからしめんには、その改良、その進歩、一に今日の青年諸子の手に依りてなされざるべからず。我工業界に於ける諸子の前途、甚だ多望なりといふべし。

今や我工業界は昔日の工業界にあらず。外國との關係は一

慎思熟慮

日も舊態に安んずるを許さず。迂陋なる技術は廢れて、斬新なる學理は應用せらるる。實に駸々として勃興の機運に向へるなり。

近來我國の社會に於て、實業を賤しむ惡弊は大に薄らぎたりといへども、青年中には、尚無形の學科を高尚なりとし、實業に就くを屑しとせず、生産家の子弟だに、なほ實業界に入るを好まざるものありと聞く。かくの如きは大なる謬見なりといふべし。青年が前途の目的を定むるには、決して一方面にのみ偏すべからず、廣く社會萬般の事業を通觀し、國家の利益と自己の將來とを併せ考へ、愼思熟慮して後、決せざるべからざるなり。

（手島精一、國士より）

二六　ボアソナード君の歸國をおくる詞

一日朝早く、余はボアソナード君を永田町の家に訪ひしに、君は例のごとく文机によりて、餘念なく法條を起草し居られたるが、その顏色疲れて常ならず覺えければ、「病やある。」と問ひしに、「病はかくなん。」とて、その足を示されたり。見れば二つの脚共に水色になりて、腫れふとりたり。余は「なに故に靜に養生し給はざるか。」と問へば、「司法大臣と約束ありて、某の日までに若干個條を起草し畢らざるべからず。此義務は病によりて背く能はず。」と答へられたり。余且はおどろき、且は覺束なく思ひて、急ぎ山田司法大臣の邸に至り、此由を告げ

文机餘念なく

且は驚き且は覺束なくおもひ

けるに、司法大臣も共に驚かれ、即ち祕書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速かに轉地療養あらむことを勸められけり。君は約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田舍に轉地せられたり。

約束當事者心おきなく

余は此時家に歸りて、竊に嘆息して謂へらく、「凡そ司ある人にして、かくまでに深き義務心に伴へる勉強を以て勤めたらむには、立法事業幷びに諸般の事の擧らざることやあるべき。」と。此事一小件なれども、余は將來ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價値ありと信ずるが爲に、別に臨みてこれを公衆の前に述ぶ。君の二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に讓りて玆に多言せず。

義務心に伴へる勉強

第二の本國

余は、實にボアソナード君と二十年來の友なり。場合によりてはわが師なり。さるを、病を以て餞の席に臨むこと能はざるは、これぞ遺憾の極なる。今書して君の旅行の安全を祝し、併せて左の詞を以て君を餞す。

余は君が曾てわが國を呼びて、第二の本國と云へりしことを記憶す。余輩は將來に、遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に、君も亦長く第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ。君の第二の本國が、立法上及び諸般の事業に於て、如何に發達するかを見て、幸に余輩の爲に必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。

（井上毅、梧陰存稿）

二十七　道德と法律との關係（二）

唱道

當今社會の風教に關して、法律に對し二樣の誤りたる觀念を抱く者あり。其一は、儒教を學びたる人などの唱道する所にして、「近來の人は一般に法律を先にして、道德を後にする弊風あり。法律上の權利義務などを主張するは、人情を刻薄ならしむる者なるを以て、道德上より視れば、此等を主張せざるを善とす。寧ろ此等は度外に置きて、單に道德上よりのみ社會を觀察すべし」と論ずる者なり。

人情を刻薄ならしむ

或意味に於て

この說は、或意味に於て誤りといふべし。勿論人は倫理道德を主として、行爲を正しうせざるべからずといへども、苟くも社會を組織して生活する以上は、其社會維持の爲に必要ありて制定せられ

維持

度外視

たる法律を、度外視することあるべからず。其法律に服從するも亦、人道の一ならずんばあらず。

又上說と全く反對なる方面より、法律に對して誤りたる觀念を抱き、「苟くも法律に於て許す事は、すべて之を行ひて可なり。猶一歩を進めては、法律に於て禁ぜざる限は、如何なる事にても、之を行ひて可なり。」と說く者あり。又「法律上有する所の權利は、飽くまで之を主張し、他人が己に對する義務は、飽くまでも之を他人に向ひて要求するを以て、人道なり。」と說く者あり。此等の說は、また誤れりといはざるを得ず。法律は決して各人の行爲の標準を示せるものに非ず。唯社會を維持する爲に必要なる事項の範圍を示すに過ぎず。社會を

標準

維持するには、かく〳〵ぜざるべからず。かく〳〵行はしめざるべからずとなし、其條項を規定したる者、これ法律なり。個人間の關係に於て、若し雙方が互にその利益を主張して爭ふ場合には、孰れに如何なる權利を認め、孰れに如何なる義務を認むれば、公平なるかを規定したる者、これ法律なり。されば法律にのみ觸れざる者、唯法律上の罪人にあらずといふべきのみ。決して完全なる人なりといふを得ず。

惟ふに、國法の禁ずる所は、決して之を犯すことあるべからず。國法の義務なりと定むる所は、己は飽くまでも之を盡さ

侵害

ざるべからず。是道德上より視るも、當然の事なりとす。然し他人に向ひて、己に對し法律上の義務を悉く盡さしめむとするは、道德上より視れば、寧ろ人の爲すべきことにあらず。他人の不正なる行爲に依りて、自己の權利を著しく侵害せられたる場合に、社會的生存の必要上、已むを得ず理非を法廷に爭ふは、道德上にても正當の事なり。法律上にても亦然りとされど、法律の許すかぎり、權利はことごとく法廷に訴へて主張せむとするが如きは、法律上にては、何等の非難すべき點なけれども、人類が成るべく安穩に、平和に生活するを善しとする所の道德主義に反するを以て、道德上より之を非難せざるべからず。

理非曲直
私法
公法

若し人が悪く善人にして、且事理に明なるときには、法律の必要を認めず。道德のみを以て支配すれば足れり。然し世には悪人多く、知識の不完全なる者も亦多數なり。是を以て、若し彼等の間に紛爭の生ずる場合には、裁判所に於て、その理非曲直を裁判せざるべからず。その標準を定めたる者が、普通の法律即ち私法なり。公法といへども、之と同理にして、若し治者が悪く賢明にして被治者が悪く順良なるときは、或は公法の必要ながるべし。然し治者は必ずしも皆賢明ならず。被治者亦必ずしも順良ならず。是を以て治者が被治者に對し、被治者が治者に對し、求め得らるゝだけの範圍を明にせざるべからず。此範圍を明にしたる者、是公法なり。

民法

二八　道徳と法律との關係(二)

爰に二三の例を擧げて說明せんに、民法に於ては、親が子を養ひ、子が親を養ふ義務を認む。或はかくの如き事は、法律に定めざるを善しとする者あり。然し若し不慈の父母ありて、相當の資產を有しながら、その子を養育せざる場合に於て、單に之を道德にのみ委したりとせんに、その父母にして道德を重んぜざる時は、其子は終に飢餓に陷らざるを得ず。此場合に於て、其子をして飢餓を免れしむる道は、國或は地方團體に於て之を收養するか、或は之を慈善家の救助に任するにあり。然し父母が相當の資產を有しながら、其子を養

育せずして、却つて之を他の慈善家、或は國或は其他の公共團體の養育に委せんとするが如きは、不當なりといはざるを得ず。

又子が親を養ふべきは、倫理上當然の事なりといへども、若し不孝の子ありて、己は相當の資產を有しながら父母の飢餓するを顧みず、道德を以て責むるも應ぜざる者あるときは、其父母は國、地方團體、或は慈善家に救助せらるゝにあらざれば、終に餓死すべし。これらの場合に、子が父を訴へ、父が子を訴ふるが如きは、誠に望ましからぬ事にして、願はくは、父よりいへば、己は餓死すとも、決して子を訴ふることなく、子よりいへば、もし己は餓死すとも、決して父を訴ふるなか

らんことを欲するなり。是實に道德上の人情なり。併し若し不幸にして、餓死するよりは、寧ろ訴へんと欲する者あるときは、法律は相當の資產を有する所の親に、子を養ふ義務を認め、子に親を養ふ義務を認むるなり。

又公法に於て、德義と法律との關係を、實例を擧げて論ぜんに、今日の憲法に於ては、一の法律案が上下兩院を通過し、御裁可を得れば法律となる者なり。併し是は唯法律上の事のみにして、政治の局に當る者は、務めて完全なる法律を作り、有害不要なる法律を作らざる事を勉むべきなり。憲法が許せばとて、濫に法律案を出し、十分にその利害得失を調査せずして之を議決し、法律として之を發布する事あらむには、

上下兩院
御裁可

法律上よりは少しも間然する所なしといへども、政治家の德義上よりして其無責任を攻めざるを得ず。

又公法は、行政官と人民との間に於て、一定の範圍內に於てのみ、人民の爲に、行政官の處分に對して、訴訟の道を開く。故に法律の認むる場合の外に於ては、人民は行政官の處分に對して、訴訟を起すを得ず。されば行政官たる者は、人民に於て訴ふる道無き限は、如何なる處分を爲すも可なるかといふに、決して然らず。法律上よりはこれを禁ぜざるも、行政官の德義として省さるべからざる事存す。人民に訴訟の道なき處に於ては、行政官の德義上の責任は、寧ろ益、重きを加ふるなり。かゝる場合に於ては、行政官たる者は、國家全體の利

間然する所なし

行政官

紊亂

益を計ると共に、各人の利益を計るべし。是實に行政官の德義なり。若し法律の許す限は、如何なる處分を爲すとも、顧るに足らずとなすに至らば、官民間の平和破れて、國家の維持は困難なるに至るべし。

之を要するに、法律と道德との關係は、法律の禁ずる所は、道德も亦之を禁ず。人類の幸福の爲に社會を組成し之を維持するが爲に、主權者が其必要を認めて制定したる法律は、各人皆之に服從せざるべからず。其法律に對する各人の批評的意見の如何に拘らず、其法律として存する限は、之に服從するは國民の義務にして、人々之に異議を挾み、服從せざるに至りては、社會の秩序紊亂して國家は維持するを得ざら

ん。他人が法律上の權利を主張するに方りては、たとひ道德上よりは之を不正當なりと考ふる事も、その權利に服從せざるべからず。是前と同一理にして、國法に服從する精神より來るなり。併し自己の行爲の標準を法律に取り、法律の許す限は、如何に瑣細なることにても、飽くまでその權利を主張し、法律の禁ぜざる限は、如何なる事を行ひても可なりとなし、道德の如きは顧るに足らずとなすに至りては、大なる誤なり。國民の多數が、此の如き誤りたる思想を抱くに至らば、その國の繁榮は長く維持するを得ざるべし。

（梅謙次郎、中等國文讀本より）

二九　努力生活

基礎を鞏固にす

鍵鑰

儉の德は以て其生活を簡易ならしめ、自己の社會に於る獨立の基礎を鞏固にすれど、吾等の生存をして意義あらしめんには、勤勞努力以て道を行ふ積極的方面を忘るべからず。既に云ふ如く、人の勞働を以て生きんが爲といふは無意義にして、人は働くが爲に生き、道を行はんが爲めに存するものなれば、勤勞努力は人道の大本、人文發展の鍵鑰なり。天惠の倉庫は此鍵鑰を以て開かれ、生存の意義は此大本により て發揮せらる。盛に節儉の必要を說き簡易生活を勸奬したる二宮尊德翁は、又勤勞を說いて、

天理は萬古變せず、人道は一日怠れば即ち廢す。然れば人道は勤むるを以て尊しと爲し、自然に任ずるを尊ばず。夫れ人道の勤むべきは己に克つの教なり。

と、己に克つて以て道に勸むこれ翁の所謂天地の化育を助くるの道にして、

夫れ我が道の尊む增殖の道は、直ちに天地の化育を贊成するの大道にして、米五合にても、麥一升にても、苧一株にても、天ツ神の積置かせらるゝ無盡藏より、鍬鎌を以て此世上に取出す大道なり。これを眞の增殖の道といふ。尊むべし、務むべし。

天つ日の惠積み置く無盡藏
鍬で掘り出せ鎌で苅り取れ。

と。朝々日は東より出で〻、夜々月は西に沈み、天地一日も其活動を止めず、茁々たる春草、生々を怠らず、滾々たる水流も亦終に石を穿ち、萬象常に其爲すべきを盡くす。昔、百丈禪師といふものあり。齢既に九十。しかも尚その作務を怠らず。常にその徒を戒めていふ、

茁々たる春草生々を怠らず

盛年重ねて來らず一日再び晨なり難し

「一日作さずんば一日食はず。」

と、傳へて以て美談とす。一日作さずんば一日食はず、これ吾等が處世の覺悟ならざるべからず。盛年重ねて來らず。一日再び晨なり難し。我が世に存するの一日は眞にこれ復び遇ひ難きの一日にして、時々刻々、晝夜を舍てざる水の流れにも似たる光陰は過去の中に消え去るにあらずや。稻葉濃州曾て長日の勤仕、懈怠の念を生ずるをいふ。澤庵禪師、爲に左の語を書して誡めていふ。

連鎖

此日無〻再日、光陰一尺璧
思へば日々の別れかな
昨日の今日に又も遇はねば。

と。濃州常に之を服膺して怠るなきを得たりと。時は金なり。金の空費すべからざるが如く、時も亦空費すべからず。人の一生は時間の連鎖なれば、一時を空費するものは自ら生命の一分を削り去るものたり。之をフランクリン(Franklin, 1706-1790)に聞く、

汝、生涯を愛するか、さらば汝の時間を徒費することなかれ。汝の生涯とは汝の時間より成るものなればなり。

と。汝の生涯を愛す。汝は汝の時間を活用せざるべからず。如何に時間を活用すべきか。そは汝が職務に對する怠りなき勤勞努力の外なきにあらずや。唯一日、唯一時、唯一分、一秒。鳴呼これ去つて復來らざるなり。

既に一たび去つて復來らずとせば、時間の規律を嚴守するはこれ努力生活の要義たるや言を待たず。ジヨン、シンクレーアは、其大學に遊べる頃より、一日の時間を左の如くに配當して之を實踐し、八十一歳の高齡に達するまで、孜々として倦まず。終に生前著はす所の書十種十八卷、其監修の下に編纂せられたるもの四種、合せて百六卷、各種の小册子に至りては三百六十種を下らざるの大著述を成しぬ。

洒掃

睡眠　七時間。　服裝　半時間。　食事と娯樂　二時間半。　運動　二時間。　學業　十二時間。

佛語辭書によりて有名なるリットレは毎朝八時に起きて、書齋の洒掃中階下に於て雜務を執掌し、九時より食事の時刻まで校正に從事し、一時より三時まで學藝時報に筆を執り、三時より六時まで辭書を編纂し、六時に食卓に就きて一時間を費し、七時より翌朝三時まで辭書の稿を續けて寢に就き、五時間の熟睡に元氣を恢復し、復八時に起きて怠ることなく、八十の高齡を以て逝きしが、佛國學士會院が全力を費しても三十年間を要すべき事業を、六十二歳より著手して獨力を以て完成したりといふ。これ皆時間の嚴守より來

秩序ある努力

れる秩序ある努力の結果にあらずや。更にジョン、ラボックが其の著「人生の快樂」に於て引用せる、諸種の格言を擧げしめよ。

ジエレミー、テーロル(Jeremy tailor)はいふ。懈怠は世界に於ける最大の奢侈物なり。そは極めて貴重なる時間を放棄して顧みざるにあり。

チェスターフィルド公、曾て其子を戒めて、時を徒費するは、これ得べき利益を失ふなり。之に反して能く時を利用するものは、これ夥多の利子を附して貯蓄し置くに異ならずと。

ゲーラはいふ。爾にして眞に熱心ならば、後と云はず今直に此の瞬間に於て爲すべきを爲し始むべし。

勤勞は時の節儉にして、努力生活の要義は時間の嚴守にあり。

精出せば氷る間のなき水車。

この心は、商人職人たりとも、隨分精を出して稼ぎさへすれば、金錢の通用滯らず、くる〳〵とまはること水車の如し。寒中にも大晦日にも滯ることあるべからず。若し不精にしてをはらざれば氷りて滯り勝ちなり。(心法抄)

黽勉努力して怠るなくんば、何の業かならざらん。南都の明詮は學の成らざるを慨きて寺を逃れんとし、偶、雨滴の地に下りて穴を穿つを見て、發奮激勵したりと。シドニー、スミス

は其座右に、

我、謇つて道路を發見せん。能はずんば自ら之を開かんのみ。

自己啓發

と掲げて自己啓發の料としたりと。運は天にありといへども、之を開くは腕にあり。勉めて倦まずんば天下何事が成らざらん。偸安姑息とは汝が開運を妨ぐるの荊棘にして、處世の前途に横たはるの毒蛇たり。之を拓き之を除きて、其行ふべきを行ひ、其爲すべきを爲す。此に大道の發見あり。吾等は一面には簡易生活に安んじて其分を守るを忘れざると共に、他面に於ては勇猛精進、歩々向上、大道に向はざるべからず。蓋し吾等の處世は保守と進歩との兩面を存す。保守一面のみを以ては常に心中悶々の情に耐へず。一歩は止め一歩は出す徒歩精神こそ吾等が處世の覺悟なれ。偏に歩を進むるに急にして、兩足等しく出さんとすれば必ず倒れ、唯分に安んずるに專らにして、兩足を出さずんば歩む能はず。吾等は此兩面を調和して、能く道を行くことを得。處世の大道も亦之に異らざるにあらざるなきか。古人はかの進歩に急にして心中悶々の情絶えざるものを戒めて、

偸安姑息

心中悶々

上見れば及ばぬことの多かりき
笠きてくらせ人の世の中。

といひて、知足安分の要を説き、知足安立の地を得せしめた

知足安分

ると共に、

下見れば我に優りしものはなし

笠とりて見よ空の高さを。

と示して、因循姑息、進歩向上の志なきものを戒めて一足踏み出さしめんとす。人の世に處するの所詮は實に此に在り。歩々其の脚痕下に注意して向上を怠るなくんば、千里萬里豈必ずしも遠しとせんや。昔江戸より京都に使ひする飛脚を業とする老人あり。足頗る健にして常に壯者を凌ぐ。同日同時に江戸を出でしものにして、何時しか二三日の遅れを此の老人に取る。壯者、禮を卑うして歩行の法を老人に問ふ。老人答へていふ、「東海道は坦々として何の嶮なけれど、街道處々に赤き石あり。此の石をだに踏まざれば足の疲少くして終に諸子を凌ぐのみ。」と。壯者其教を奉じて脚下に注意し歩々赤石を求むるに、五十三驛一もかゝるものあるなし。しかも行程平生に越え、常に十日を費す所、七日にして達す。歸路亦其石を求むるに痕跡もあらざりしが、行程の早きこと往路の如し。是に於て老飛脚を訪ひて、赤き石の求め難きも、其行程平生に越えたるを告ぐ。老飛脚呵々大笑していふ、「赤き石もとよりあるなし。唯汝の脚痕下に注意せしめたるのみ。」と。一話以て處世の箴と爲すべきにあらずや。歩々其脚痕下に注意して怠ることなき努力生活こそ、汝が成功の要義なれ。

（加藤玄智、修養論、）

呵々大笑

處世の箴

三〇　吉野山

一、麓も峯も咲きうづむ
　花の白雲立ちなびく
　吉野の山の曙を
　唯うるはしと見る勿れ。

「こゝにても雲井のさくら咲きにけり。
　唯かりそめの宿とおもふに。」

御階のさくら徒に
　昔に歸る春待ちし
　涙のいにしへ思ひ酌めよ。

二、千本の花を掃き捨てて

白き嵐の吹きさわぐ
　吉野の山の夕暮を
　唯くちをしと見る勿れ。

「かへらじとかねて思へばあづさゆみ
　なき數に入る名をぞ止むる。」

繩手の風のはげしくて
　若木の楠の折れたりし
　涙のいにしへ思ひ酌めよ。

（吉岡鄉甫、中等唱歌）

再訂
明治讀本卷六　終

明治四十三年一月廿六日
文部省檢定濟

明治三十八年十一月十二日印刷
明治三十八年十一月十五日發行
明治三十九年二月一日訂正印刷
明治三十九年二月五日訂正發行
明治四十年一月三十日訂正再版印刷
明治四十年二月三日訂正再版發行
明治四十二年十一月五日再訂三版印刷
明治四十二年十一月九日再訂三版發行
明治四十三年一月十二日再訂四版印刷
明治四十三年一月十七日再訂四版發行

再訂明治讀本奥附

定價 全十冊 各金貳拾五錢

著作者 芳賀矢一

發行兼印刷者 東京市神田區裏神保町九番地 坂本嘉治馬

發行所 東京市神田區裏神保町（長電話本局一〇三六番）
合資會社 冨山房

販賣所 東京市神田區南乘物町（長電話本局八九二番）（電話本局一六四番）
明治圖書株式會社 振替貯金口座四九一五番

印刷所 凸版印刷株式會社

安藝郡
倉橋島室之
津西垂之海